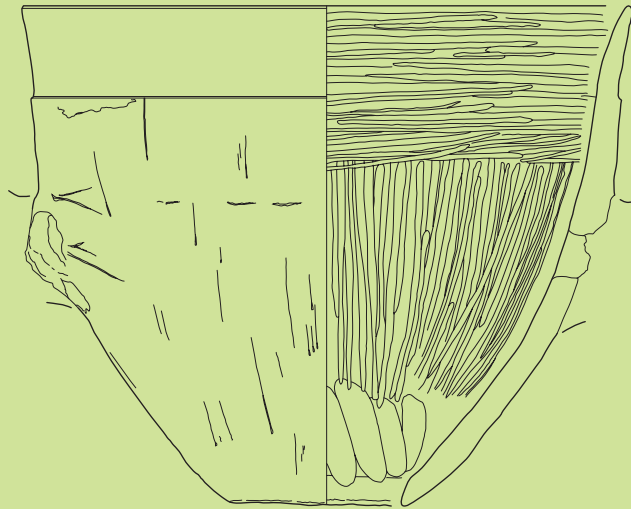


# 下遠田遺跡

(第5地点)

店舗建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書



2016

水戸市教育委員会



げ どお だ い せき  
下 遠 田 遺 跡

(第5地点)

店舗建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

2016

水戸市教育委員会





調査区全景（東から）



第2号竖穴建物跡全景（南東から）



## ごあいさつ

下遠田遺跡は、水戸市の南西部（旧内原町域）に位置し、涸沼前川右岸の舌状台地上に立地しております。当該遺跡では、古墳時代後期の集落跡や、室町時代の館跡に伴う溝などが発見されており、当時から連綿と続く、人々の営みを知ることができます。

歴史的文化遺産のひとつである埋蔵文化財は、工事や開発などにより一度破壊されると二度と原状に復すことができないため、私たちが大切に保存しながら後世へ伝えていかなければならない貴重な財産です。

近年の大規模開発等による都市化の様相が強まる中で、埋蔵文化財の現状保存は非常に困難になりつつありますが、本市においてもその意義や重要性を踏まえ、文化財保護法及び関係法令に基づいた保護保存に努めているところです。

このたびの調査は、当該遺跡内に店舗建設工事が計画され、遺跡への影響が予想されたため、文化財保護の観点から十分に協議を重ねましたが、遺跡の現状保存が困難であるとの結論に至り、次善の策として発掘調査を実施し、記録の上での保護措置を講ずることとしたものです。

本調査により、古墳時代後期の竪穴建物跡が確認され、当時の人々の生活の様子が明らかになるとともに、土地利用の状況を捉えることができました。これらの成果は、地域社会の歴史を繙くうえで貴重な資料となることでしょう。

ここに刊行する本書が、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

終わりに、本調査の実施に当たり多大な御理解と御協力をいただきました事業主、周辺住民の皆様、並びに種々の御指導、御助言をいただきました皆様方に心から感謝を申し上げます。

平成 28 年 3 月

水戸市教育委員会

教育長 本 多 清 峰





## 例 言

- 1 本書は店舗建設工事に伴う、茨城県水戸市五平町 288 - 1 外 2 筆に所在する下遠田遺跡第 5 地点の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、水戸市教育委員会による試掘調査に基づいて、開発する店舗建築工事に伴う造成部分のうち 124 m<sup>2</sup>を対象とした。
- 3 調査にあたり事業者、水戸市教育委員会、関東文化財振興会株式会社（代表取締役 宮田和男）の三者で協定書を取り交わし、調査に関しては水戸市教育委員会の指導のもと、関東文化財振興会株式会社（萩原宏季）が実施した。
- 4 発掘調査組織は下記の通りである。






調査担当者	宮田 和男	日本考古学協会員	関東文化財振興会株式会社代表取締役
調査員	萩原 宏季	関東文化財振興会株式会社調査研究員	
事務局	本多 清峰	水戸市教育委員会教育長	
	中里誠志郎	水戸市教育委員会事務局教育部長	
	飯村 博史	水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課埋蔵文化財センター所長	
	米川 暢敬	同主幹	
	太田友里乃	同主事	
	昆 志穂	同埋蔵文化財専門員	
	丸山優香里	同埋蔵文化財専門員	
	鈴木 学	同埋蔵文化財専門員	
	菅谷 瑛奈	同嘱託員	
	山戸 裕子	同嘱託員	
- 5 発掘調査は、平成 27 年 10 月 19 日から平成 27 年 10 月 31 日まで行い、整理調査・報告書作成は関東文化財振興会株式会社にて、平成 27 年 11 月 1 日に開始し、平成 28 年 3 月 31 日の報告書刊行をもって終了した。
- 6 本調査における出土遺物及び実測図・写真等は水戸市教育委員会が保管している。
- 7 本報告書の執筆は、第 1 章 1 節・第 2 章を米川暢敬が、第 1 章 2 節・第 3 章～第 4 章までを水戸市教育委員会の指導のもと、萩原宏季が担当した。
- 8 本書の編集は萩原が担当した。
- 9 自然科学分析は 株式会社 パレオ・ラボ に依頼した。
- 10 調査及び本報告書の作成にあたり、次の方々からご指導、ご協力を賜わった。ここに記して感謝の意を表したい。（五十音順）

樫村宣行 佐久間弘美 那珂市シルバー人材センター 古川市郎土地家屋調査士事務所
- 11 調査参加者（五十音順）

調査作業	阿部武男	大越慶子	鬼沢勲	川又恵美子	佐々木由二	清水晃	白土和男
	高野正行	谷川明正	平井百合子	藤倉秋之助	益子光江	村上巧兒	
整理作業	大越慶子	大山晴美	對馬むつみ	平井百合子	益子光江		

# 凡 例

- 1 本書に記してある座標値は、世界測地系第IX系を用いている。方位は座標北を示す。
- 2 本文中の色調表現は、『新版標準土色帖』2008年版（農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いた。
- 3 標高は、海拔標高である。
- 4 掲載した図面の基本縮尺は、以下のとおりである。  
遺構図 調査地点配置図 1/2,500 周辺遺跡地図 1/25,000 グリッド設定図 1/150  
 竪穴竪穴建物跡 1/60  
 なお、変則的な縮尺を用いた場合には、スケールによってその縮尺を示した。  
遺物図 土器・土製品・金属製品 1/3 を原則とする。ただし、種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで示した。
- 5 遺構・遺物実測図中のスクリーントーン及び記号は、以下に示すとおりである。

	竈構築材・黒色処理		竈火床面・焼土
	付着炭化物		赤彩・施釉
	充填ローム土	---	硬化面
●	土器・土製品・石製品		
- 6 実測図・本文中に用いた略記号は以下を示す。  
P：ピット TP：テストピット K：攪乱 S：石
- 7 遺物観察表の法量単位はcmである。法量に付した〔 〕は復元値、（ ）は残存値を示す。
- 8 「主軸」は竈を通る軸線とし、主軸方向はその主軸が座標北から見てどの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例 N－10°－W）
- 9 本遺跡の略号は、305179－005 である。遺物の注記もこれに従っている。
- 10 グリッドは、X＝39,156 m、Y＝45,544 mを起点とし、2 m四方の小グリッドを使用した。

# 目 次

巻頭写真図版

あいさつ

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の結果	7
第1節 調査の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1  堅穴堅穴建物跡	8
2  遺構外出土遺物	19
第4章 総括	21
付 章 炭素・窒素安定同位体比分析	24
写真図版	
抄 録	
奥 付	

# 挿図目次

第1図 調査地点配置図	2	第9図 第2号堅穴建物跡実測図	13
第2図 周辺遺跡地図	4	第10図 第2号堅穴建物跡竈実測図	14
第3図 第3・5地点遺構位置図	6	第11図 第2号堅穴建物跡遺物出土状況図	15
第4図 遺構全体図	6	第12図 第2号堅穴建物跡出土遺物実測図(1)	16
第5図 基本土層図	7	第13図 第2号堅穴建物跡出土遺物実測図(2)	17
第6図 第1号堅穴建物跡実測図	9	第14図 第2号堅穴建物跡出土遺物実測図(3)	18
第7図 第1号堅穴建物跡竈・遺物出土状況図	10	第15図 遺構外遺物実測図	19
第8図 第1号堅穴建物跡出土遺物実測図	11		

## 表目次

表 1 周辺遺跡一覧表……………	5	表 4 遺構外出土遺物観察表……………	20
表 2 第 1 号竪穴建物跡出土遺物観察表……………	12	表 5 出土遺物計量表……………	20
表 3 第 2 号竪穴建物跡出土遺物観察表……………	18・19		

## 写真図版目次

### 【遺構写真】

#### PL 1

調査区全景（東から）

調査前風景（南西から）

遺構確認状況（西から）

第 1 号竪穴建物跡完掘状況（南東から）

第 1 号竪穴建物跡土層堆積状況（南東から）

#### PL 2

第 1 号竪穴建物跡遺物出土状況（南東から）

第 1 号竪穴建物跡遺物出土状況（東から）

第 1 号竪穴建物跡竈完掘状況（南東から）

第 1 号竪穴建物跡竈袖部断割り状況（南東から）

第 1 号竪穴建物跡掘方完掘状況（南東から）

第 2 号竪穴建物跡完掘状況（南東から）

第 2 号住居跡土層堆積及び遺物出土状況（北西から）

第 2 号竪穴建物跡完掘状況（西から）

#### PL 3

第 2 号竪穴建物跡遺物出土状況（南東から）

第 2 号竪穴建物跡遺物出土状況（南から）

第 2 号竪穴建物跡遺物出土状況（東から）

第 2 号竪穴建物跡竈完掘状況（南東から）

第 2 号竪穴建物跡竈土層堆積状況（南東から）

第 2 号竪穴建物跡竈土層堆積状況（南から）

第 2 号竪穴建物跡竈遺物出土状況（南東から）

第 2 号竪穴建物跡竈袖部断割り状況（南東から）

### 【遺物写真】

#### PL 4

第 1 号竪穴建物跡 - 1

第 1 号竪穴建物跡 - 2

第 1 号竪穴建物跡 - 3

第 1 号竪穴建物跡 - 4

第 1 号竪穴建物跡 - 5

第 1 号竪穴建物跡 - 6

第 1 号竪穴建物跡 - 7

#### PL 5

第 1 号竪穴建物跡 - 8

第 1 号竪穴建物跡 - 9

第 1 号竪穴建物跡 - 10

第 1 号竪穴建物跡 - 11

第 2 号竪穴建物跡 - 1

#### PL 6

第 2 号竪穴建物跡 - 2

第 2 号竪穴建物跡 - 3

第 2 号竪穴建物跡 - 4

第 2 号竪穴建物跡 - 5

第 2 号竪穴建物跡 - 6

第 2 号竪穴建物跡 - 8

第 2 号竪穴建物跡 - 9

第 2 号竪穴建物跡 - 11

#### PL 7

第 2 号竪穴建物跡 - 10

第 2 号竪穴建物跡 - 12

第 2 号竪穴建物跡 - 13

第 2 号竪穴建物跡 - 15

#### PL 8

第 2 号竪穴建物跡 - 14

第 2 号竪穴建物跡 - 16

第 2 号竪穴建物跡 - 17

遺構外 - 1・2

遺構外 - 3

遺構外 - 4

# 第1章 調査に至る経緯と調査経過

## 第1節 調査に至る経緯

平成27年2月19日付けで、共同住宅建築工事に伴い、事業者から水戸市教育委員会（以下「市教委」という。）教育長あて、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会があった。

照会箇所である五平町288-1番地外2筆は、周知の埋蔵文化財包蔵地「下遠田遺跡」の範囲内に該当していることから、事業者に対し、当該事業の実施にあたっては、事前に試掘・確認調査を実施する必要があること、文化財保護法（以下「法」という。）第93条第1項に基づいて茨城県教育委員会（以下「県教委」という。）教育長あて届出が必要である旨回答した。

その後、事業者から提出のあった事業計画に基づき、平成27年4月10日、4月16日、7月30日に、3次にわたり試掘・確認調査を実施したところ、事業対象地内において堅穴建物跡を確認した。これら確認された埋蔵文化財に対して、店舗建設工事及びそれに伴う抜根工事の実施による影響が避けられないと判断したことから、市教委は、埋蔵文化財の保存のあり方について代理人を通じ事業者との協議を重ねたが、店舗建設予定地以外については、抜根を行わず伐採に留める等の設計変更により保護層の確保が見込まれたものの、店舗建設予定地直下の一部については、設計変更による遺構の現状保存が極めて困難であるとの結論に達した。このため、事業者から提出のあった届出については、上記部分において、次善の策として記録保存を目的とした本発掘調査を実施すべき旨の意見書を付して県教委教育長あて進達した。

平成27年10月9日付けで、県教委教育長から事業者に対し、抜根工事の実施により埋蔵文化財に影響がある範囲においては工事着手前に発掘調査を実施すること、それ以外の開発範囲については工事にあたって市教委が立会うこと、また調査の結果重要な遺構が確認された場合にはその保存について別途協議を要する旨の指示・勧告があった。

これを受けて、事業者は関東文化財振興会株式会社と発掘調査業務委託契約を締結し、当該調査を下遠田遺跡第5地点発掘調査として、平成27年10月19日から発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 調査の経過

平成27年9月下旬より機材整備・確認等の調査準備に入り、9月25日に委託者・施工業者の立ち会いのもと調査範囲の設定及び調査区範囲内の栗の木の伐採を行う。10月18日に作業案内看板の設置、機材の搬入、調査区周囲の安全対策整備等を行い、19日から重機による表土除去を開始し、併せてGPS測量による基準杭とグリッドの設定を行う。21日からは現場補助員による遺構確認調査に入る。堅穴建物跡2軒を確認するが、その内1軒が開発予定地側の調査区外へと延びていたため、水戸市教育委員会との協議のもと調査区の一部拡張を行い、その結果調査面積は110㎡から124㎡へと変更になった。22日より遺構の掘削作業を開始し、29日に調査区全景写真撮影を行う。同日水戸市教育委員会による終了確認が実施され、遺構調査を終了した。30日に計測調査を終え全ての調査が終了した。31日に機材撤去、調査区埋め戻しを行い、現場における全ての作業が終了し、現場を委託者に返還した。

11月1日より整理作業を開始し、遺物洗浄、注記、接合、実測、トレース、写真撮影を行い、図版作成、原稿執筆等を進める。その後、報告書・図面・遺物・台帳類を水戸市教育委員会に返還し、整理作業の全工程が終了した。



第1図 調査地点配置図

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

下遠田遺跡は、水戸市の南西部（旧内原町）に位置し、東茨城台地の西部に立地する。東茨城台地は、標高30～37mの平坦もしくは起伏の少ない地形を呈しており、涸沼前川や涸沼川が涸沼に流入する過程で開析された幅広な沖積低地によって分断され、舌状台地を形成している。この舌状台地は、鯉淵地区付近から東へ延びる涸沼前川右岸一帯の広大な範囲を有しており、当該遺跡は涸沼前川右岸及びその支流で形成された支谷に挟まれた標高約33mの舌状台地上、その先端部に所在する。台地上から沖積低地へは緩斜地形を呈しており、沖積低地には水田が営まれ、台地上は集落や畑地として利用されている。

### 第2節 歴史的環境

下遠田遺跡周辺における人類の活動は、五平遺跡で出土した硬質頁岩製の細石刃核や、湿気遺跡で出土した流紋岩製剥片から、旧石器時代まで遡ることができる。

縄文時代の土地利用は、草創期から中期にかけて、台地上における集落の形成がみられるようになる。該期の遺跡としては、撚糸文や貝殻条痕文系土器などが出土した、草創期後半から早期前半の五平遺跡、早期の大塚南遺跡、興国遺跡、興国東遺跡、尖底土器底部が出土した内原南遺跡、前期の竹ノ内遺跡などが知られており、これら集落の多くは、涸沼前川支流の古矢川や小河川の上流から中流域にかけて、小規模な範囲で分布している。

縄文時代中期になると、遺跡数は爆発的に増加し、杉崎遺跡、蔵田千軒遺跡、前峰遺跡、宮前遺跡、蓮沼遺跡、江川遺跡、スワ遺跡、西川遺跡、竜開遺跡、三湯向山遺跡、塔ノ上遺跡、万蔵寺遺跡、湿気Y字路東遺跡、一の砂南遺跡、一の砂西遺跡、トソ遺跡などで該期の土器片が採集されており、土地利用がより広範囲に及んでいたことを示唆するものである。当該遺跡においても、明確な遺構については未だ捉えられてはいないものの、縄文時代中期に帰属する土器片が採集されており、このころから土地利用が行われ始めたものと考えられる。縄文時代後期から晩期にかけては遺跡数が著しく減少する。

弥生時代は五平遺跡、杉崎遺跡、小林東遺跡、万蔵寺遺跡などで、少量ながらも弥生時代中期と後期の土器片が採集されている。

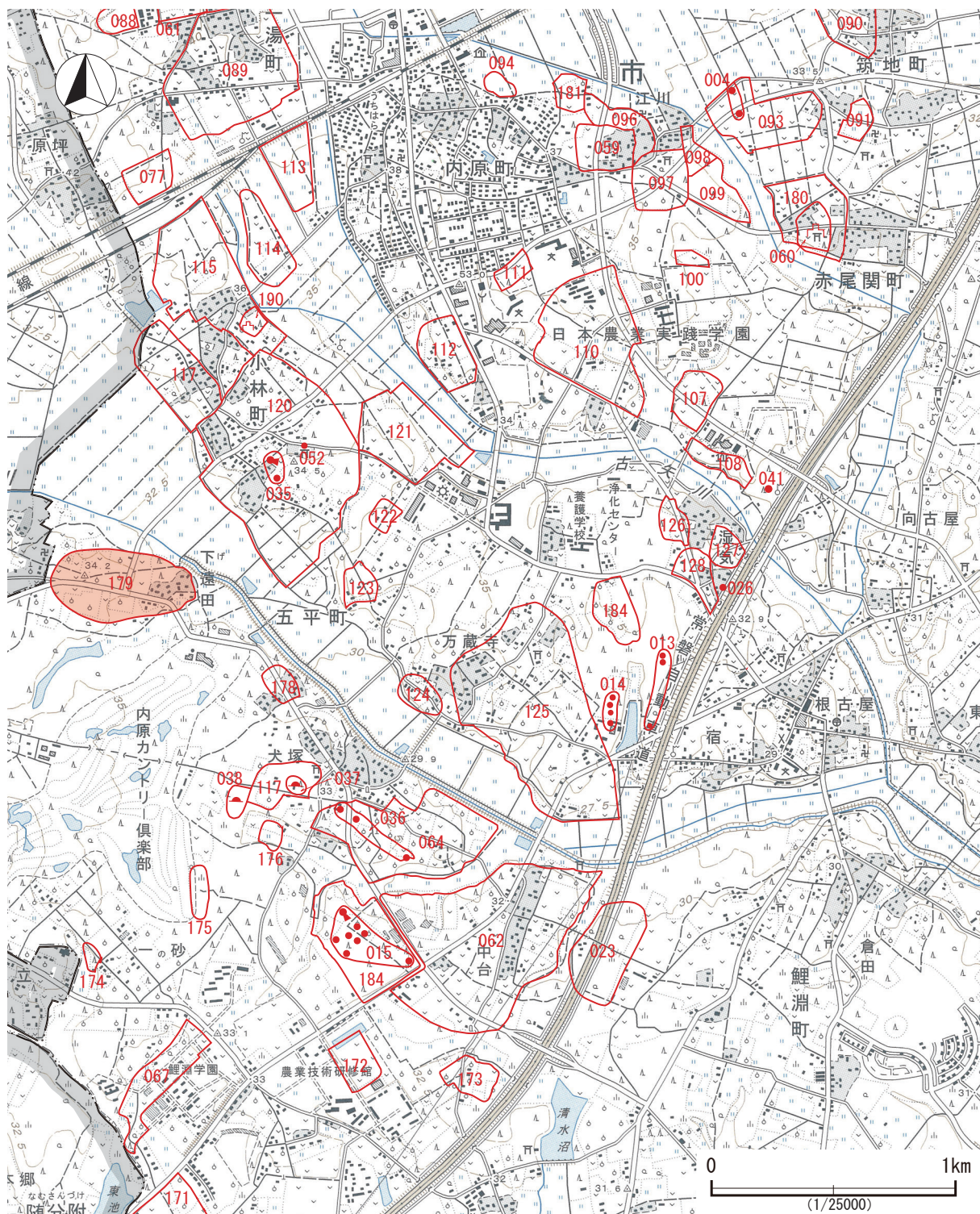
古墳時代には、論田塚古墳群、杉崎古墳群、寺池東古墳群、寺池西古墳群、権現古墳群、大塚古墳群などを初めとして、多くの古墳群が営まれるようになる。水戸市南西部（旧内原町域）は、県下でも有数の古墳密集地であり、当該遺跡の近辺に留まらず、北部・東部においても、牛伏古墳群やコロニー古墳群などが造営されている。涸沼前川水系域における古墳は、大多数が円墳である。論田塚古墳群は、基盤整備事業の影響によりその詳細を明らかにし得ないが、立花受孔を持たない石枕、直刀、鏡、鉄鏃が出土しており、5世紀後半代の造営年代が与えられている。権現古墳群では、多くの古墳が開発で失われており、現在は円墳4基が残存するのみである。茨城県教育財団による発掘調査では、第11号墳は陸橋部を伴っていたものの主体部は確認されず、6世紀後半から7世紀前半にかけての土師器片が僅かに出土したに留まっている。開発による古墳の湮滅は、大塚古墳群においても同様であり、現在は円墳3基のみがその姿を留めている。第3号墳からは石枕が発見されている。

古墳時代における集落の動態は、前期・後期においてその分布が認められ、当該遺跡においても、該期の竪穴・竪穴建物跡が確認されている。

## 第2章 遺跡の位置と環境

奈良・平安時代には、当該地域は那賀郡安賀郷と茨城郡茨城郷の境界にあたる地域であったものと考えられる。該期の遺跡としては、遺物の散布状況などから、万蔵寺遺跡、小林遺跡、舞台遺跡、杉崎遺跡、塔ノ上遺跡、宮前遺跡などが集落として存在していた可能性がある。中には円面硯の採集が報告されている蔵田千軒遺跡もあり、郷内における律令国家地方末端支配の一端を担った集落の存在も想定されよう。

中世を迎えると、当該地域には江戸氏の支城とされる江川館跡とされる江川館跡とされる江川館跡が営まれ、なおも続く人々の営みを垣間見ることができる。

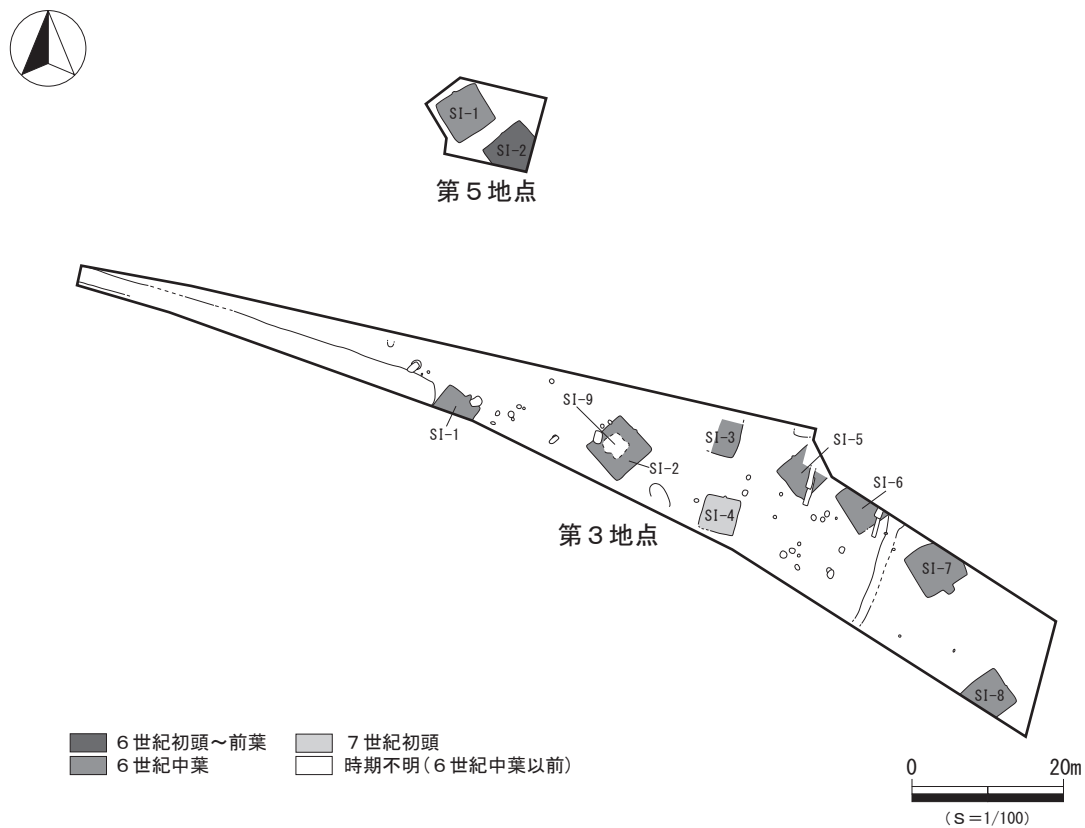


第2図 周辺遺跡地図 (『水戸市埋蔵文化財包蔵地分布地図 (平成24年度版)』に加筆)

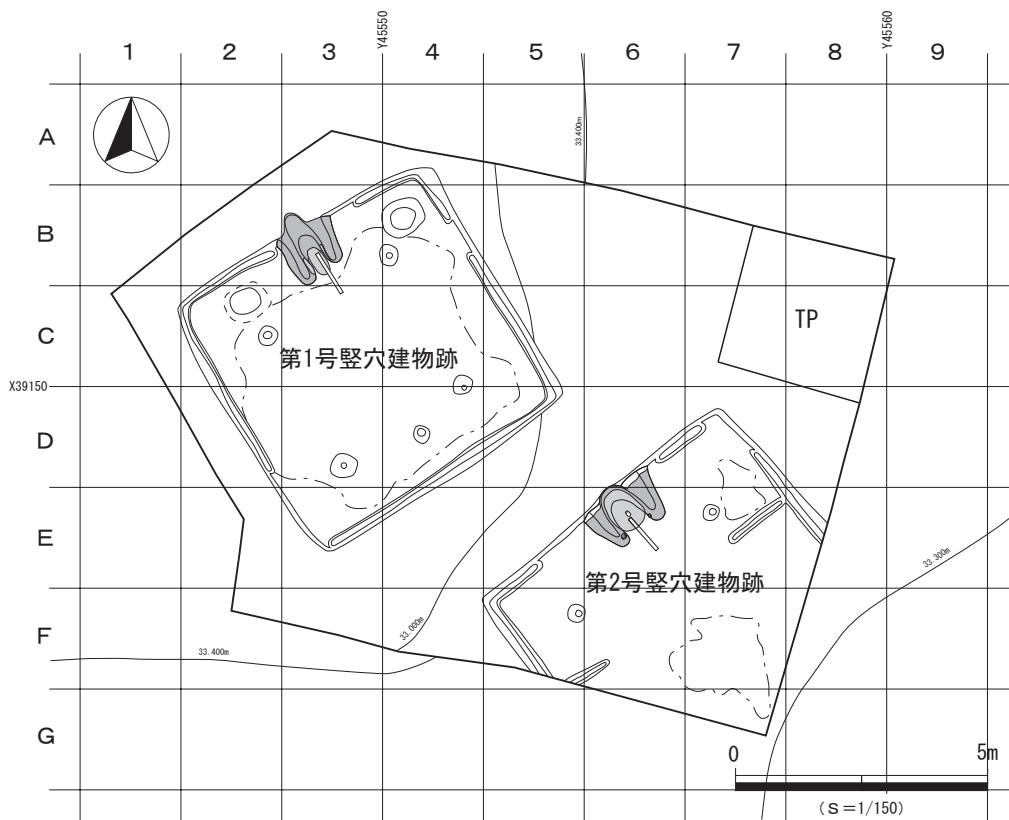


第1表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	遺物	備考
004	論田塚古墳群	古墳群	石枕, 直刀, 鏡, 鉄鏃	隠滅
013	寺池東古墳群	古墳群		円3
014	寺池西古墳群	古墳群		円3
015	権現古墳群	古墳群	土師器(古後), 須恵器	前方後円1, 円7 S 63 発掘調査
023	中台遺跡	包蔵地	土師器, 須恵器(平)	
026	湿気経塚	経塚	経石	隠滅
035	大塚古墳群	古墳群	埴輪(古後), 陶器, カワラケ, 五輪塔	円1
036	犬塚古墳群	古墳群	須恵器(古後), 埴輪	円3 S 63 発掘調査
037	犬塚A庚申塚群	塚群		塚5
038	犬塚B庚申塚群	塚群		塚6
052	六部塚	塚		塚1
059	江川館跡	城館跡		
060	赤尾関館跡	城館跡		土塁
061	三湯館跡	城館跡		
062	蔵田千軒遺跡	集落跡	縄文土器(早・前・中期), 土師器, 須恵器, 円面硯, 軒丸瓦(奈・平),	S 63, H2発掘調査
064	五平遺跡	包蔵地	縄文土器(前期), 土師器, 須恵器(奈・平), 陶器, 砥石	S 63 発掘調査
067	東池北遺跡	包蔵地		
077	舞台西遺跡	包蔵地	土師器, 須恵器(奈・平)	
087	宮前遺跡	包蔵地	縄文土器(中期), 土師器(平)	
088	沢山遺跡	包蔵地	須恵器(平)	
089	舞台遺跡	包蔵地	縄文土器(前期), 磨石, 土師器(古後・奈・平), 須恵器(奈・平)	
090	坊ノ内遺跡	包蔵地	土師器	
091	蓮沼遺跡	包蔵地	縄文土器(中期), 弥生土器(後期), 土師器, 須恵器(平), カワラケ	
093	内田遺跡	包蔵地	弥生土器(後期), 土師器(古前), 須恵器(平), カワラケ, 砥石	
094	下坪遺跡	包蔵地		
096	館遺跡	包蔵地	陶器, カワラケ	
097	道下遺跡	包蔵地	弥生土器(後期), 土師器, 須恵器(奈)	
098	江川遺跡	包蔵地	縄文土器(中期), 土師器, 須恵器(平)	
099	新田山遺跡	包蔵地	縄文土器(早期), 土師器, 須恵器(奈・平), 陶器, 磨石	
012	杉崎古墳群	古墳群	埴輪, 石碗	前方後円4, 円28
107	平五郎治北遺跡	包蔵地	縄文土器(早・前期), 磨製石斧, 土師器(古後), 須恵器, 陶器(中世)	
108	平五郎治西遺跡	包蔵地	土師器(古後)	
110	内原南遺跡	包蔵地	縄文土器(前期), 土師器(古後・奈), 須恵器(奈)	
111	スワ遺跡	包蔵地	縄文土器(中期), 土師器	
112	竹ノ内遺跡	包蔵地	縄文土器(前期), 土師器(古後), 須恵器(平), カワラケ	
114	竜開遺跡	包蔵地	縄文土器(中期), 須恵器(平)	
113	西川遺跡	包蔵地	縄文土器(中期), 土師器(古中・奈・平), 須恵器(平)	
115	三湯山遺跡	包蔵地	縄文土器(中期), 土師器(古前・平), 須恵器(奈・平), 陶器	
117	野際遺跡	包蔵地	弥生土器(後期)	
120	小林遺跡	包蔵地	土師器(古中・奈), 須恵器(奈・平), 陶器	
121	三枚方遺跡	包蔵地	土師器	
122	小林東遺跡	包蔵地	縄文土器(前期), 陶器(中世)	
123	塔ノ上遺跡	包蔵地	縄文土器(中期), 土師器(古後), 須恵器, 硯(平)	
124	ヲモテ遺跡	包蔵地	須恵器(平), 磨石, 土師器, 陶器	
125	万蔵寺遺跡	包蔵地	縄文土器(前・中期), 弥生土器(後期), 土師器(古前・古後・平), 須恵器(奈・平), 磨石, 砥石, 灰釉陶器, カワラケ	
126	湿気北遺跡	包蔵地	陶器	
128	湿気Y字路東遺跡	包蔵地	縄文土器(中期), カワラケ, 内耳土器	
171	一の砂西遺跡	包蔵地	縄文土器(早・中期), 土師器, 須恵器(平), カワラケ, 陶器	
172	一の砂北遺跡	包蔵地	土師器, 須恵器	
173	清水沼西遺跡	包蔵地	土師器, 須恵器	
174	興国遺跡	包蔵地	土師器, 須恵器, 鉄滓	
175	興国東遺跡	包蔵地	縄文土器(早期), 土師器, 須恵器(平), 鉄滓, 窯壁	
176	犬塚南遺跡	包蔵地	縄文土器(早期), 磨石, 陶器	
177	犬塚西遺跡	包蔵地	カワラケ	
178	川梅遺跡	包蔵地	土師器(古), 陶器	
179	下遠田遺跡	集落跡	縄文土器(中期), 土師器, 須恵器(古後・平), 陶器	
180	山王遺跡	包蔵地	土師器(古前・平), カワラケ, 陶器	
181	トノ遺跡	包蔵地	縄文土器(中期), 土師器, 須恵器(奈・平), 砥石	
184	中台西遺跡	包蔵地	縄文土器(前期), 土師器(古後), 須恵器(奈)	
190	小林館跡	城館跡	堀跡	



第3図 第3・5地点遺構配置図



第4図 遺構全体図

# 第3章 調査の成果

## 第1節 調査の概要

下遠田遺跡第5地点は水戸市五平町（旧内原町）に所在し、水戸市南西部を流れる涸沼前川右岸の標高約33 mの舌状台地上に位置している。調査区は総面積124 m<sup>2</sup>で、現況は栗畑である。調査の結果、古墳時代後期の竪穴建物跡2軒が確認された。当該期以外の遺物は、表土中より須恵器の細片が2点、陶器片が1点、不明鉄製品が1点出土したのみである。

遺物は、遺物収納コンテナ（60 × 40 × 20 cm）に6箱分出土している。主な遺物は、土師器（坏・鉢・甕・甔）、須恵器片、陶器片、土製品（支脚）、石製品（白玉）、不明鉄製品などである。

## 第2節 基本層序

調査区北東隅の台地上の平坦面にあたるB7～9、C7～9、D8地点にテストピットを設定し、土層の堆積状況を確認した。土層は8層に分層できる。土層観察は以下のとおりである。

第I層は黒褐色の耕作土で、層厚は17～34 cmである。締まりはなくサラサラとしている。

第II層はにぶい黄褐色のソフトローム層で白色粒子を微量含む。遺構確認作業は同層上面において行った。締まりは弱く、層厚は15～25 cmである。

第III層は明黄褐色のハードローム層で赤色粒子を微量含む。締まりは強く、層厚は22～38 cmである。

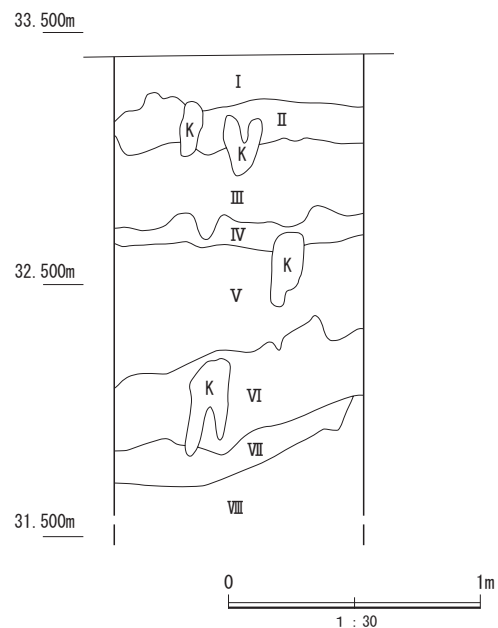
第IV層は黄褐色のハードローム層で締まりは極めて強い。層厚は5～16 cmである。

第V層は黄褐色のハードローム層で第IV層と似ているが、赤色粒子とパミス（Pamis）を微量に含んでおり、色調も若干暗い。第2黒色帯相当層と考えられる。締まりは極めて強く、層厚は34～62 cmである。

第VI層は明黄褐色でパミス（Pamis）を多量、赤色粒子を微量含んでいる。鹿沼軽石相当層と考えられる。層厚は25～39 cmである。

第VII層は黄褐色のハードローム層でパミス（Pamis）を少量、赤色粒子を微量含んでいる。締まりは極めて強く、層厚は10～21 cmである。

第VIII層は黄褐色のハードローム層で赤色粒子を微量含む



第5図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡（第6～8図，第2表，PL 1・2・4）

位置：A 3・4，B 2～5，C 1～5，D 2～5，E 2～4

規模・平面形：東西 5.9 m，南北 5.85 m の方形である。

主軸方向：N - 31° - W

残存壁高：確認面から最大高 43cm を測り，外傾して立ち上がる。

壁溝：南西壁の南西隅，北東壁北部を除き，幅 12～20 cm で廻る。断面形はU字状を呈す。

床：ほぼ平坦で，中央部付近一帯がよく硬化している。

遺構埋没状況：7層に分層できる。第1～3層は黒色土を主体とした自然堆積である。第4～6層には比較的多くのロームブロックや粒子が含まれている為，竪穴建物廃絶後埋め戻されたものと考えられる。第7層は貼床の構築土である。

柱穴：5箇所検出され，P 1 から P 4 は配置から主柱穴と考えられる。直径 42～57 cm，深さ 64～92 cm を測る。P 5 は出入口施設のピットと考えられ，直径 37 cm，深さ 46 cm を測り，南東壁側に傾く様に穿たれている。

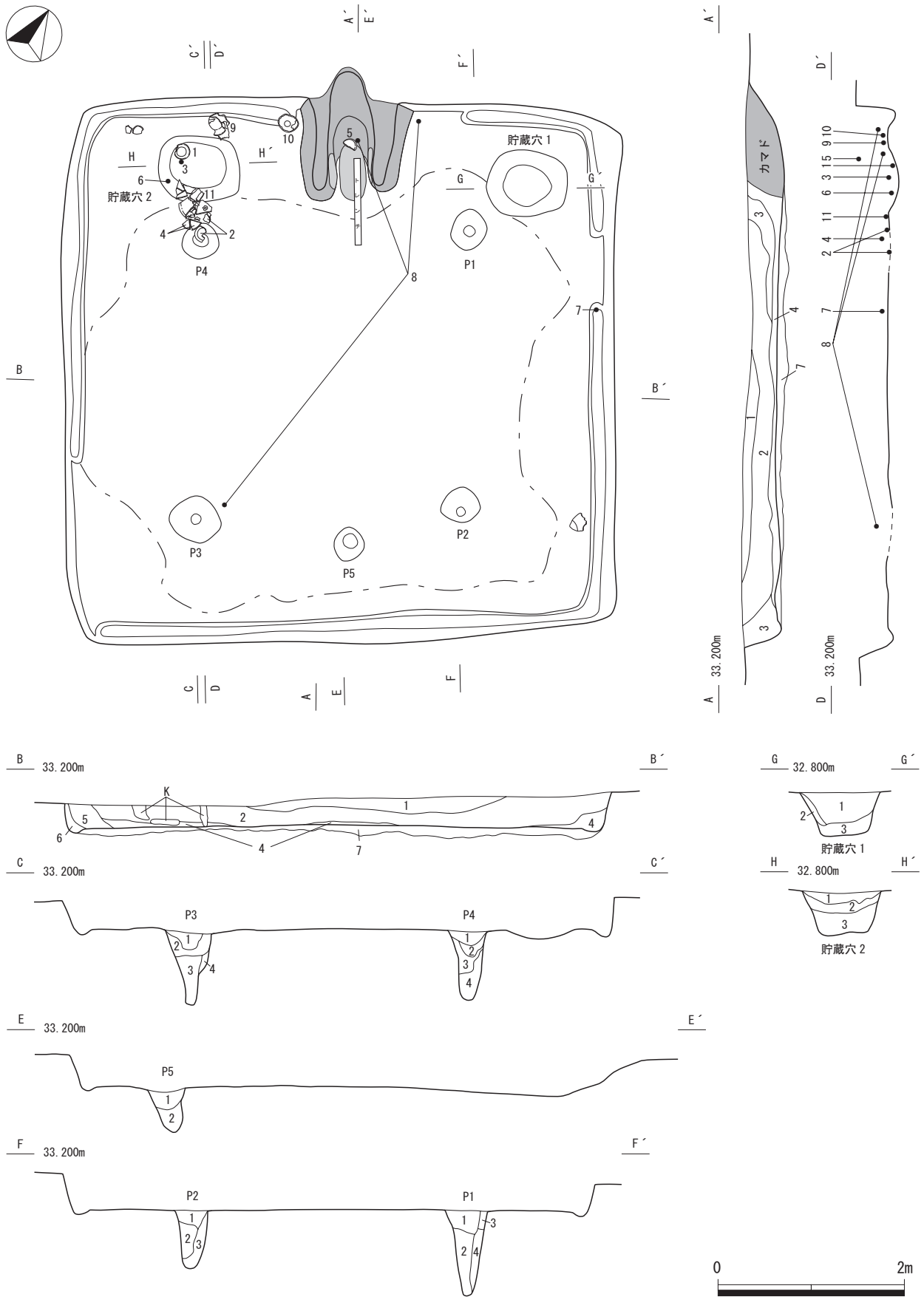
竈：北東壁中央部にあり，砂質粘土によって構築される。焚口部から煙道部までは 138 cm を測り緩斜して立ち上がる。燃焼部幅は 36 cm である。煙道部は掘り方も含め，壁外へ 34 cm 程削り出して造られ，袖部と同質の粘土を貼り造られている。天井部は崩落しており，竈土層断面中，第6層が崩落土と考えられる。また袖部の基部の最大幅は約 42 cm で，床面上に粘土を積み上げて構築されている。火床部は床面を 7 cm 程掘り下げた後，ロームブロックを含む第 16 層土を詰めており，火熱を受けゴツゴツと赤変硬化している。初期の火床面は第 16 層直上で床面より 4 cm 程低く，その後焼土と灰を含む第 8・9・10 層が堆積し，本跡廃絶時には床面とほぼ同じ高さに火床面があったものと考えられる。火床部の両袖も火熱を受け赤変硬化している。

貯蔵穴 1：竪穴建物北東壁東隅に位置する。長軸 87 cm，短軸 72 cm，深さ 47 cm を測る。断面形は逆台形で壁は緩斜して立ち上がる。覆土は 3 層に分層でき人為堆積と考えられる。覆土中には土師器の細片が混入していた。

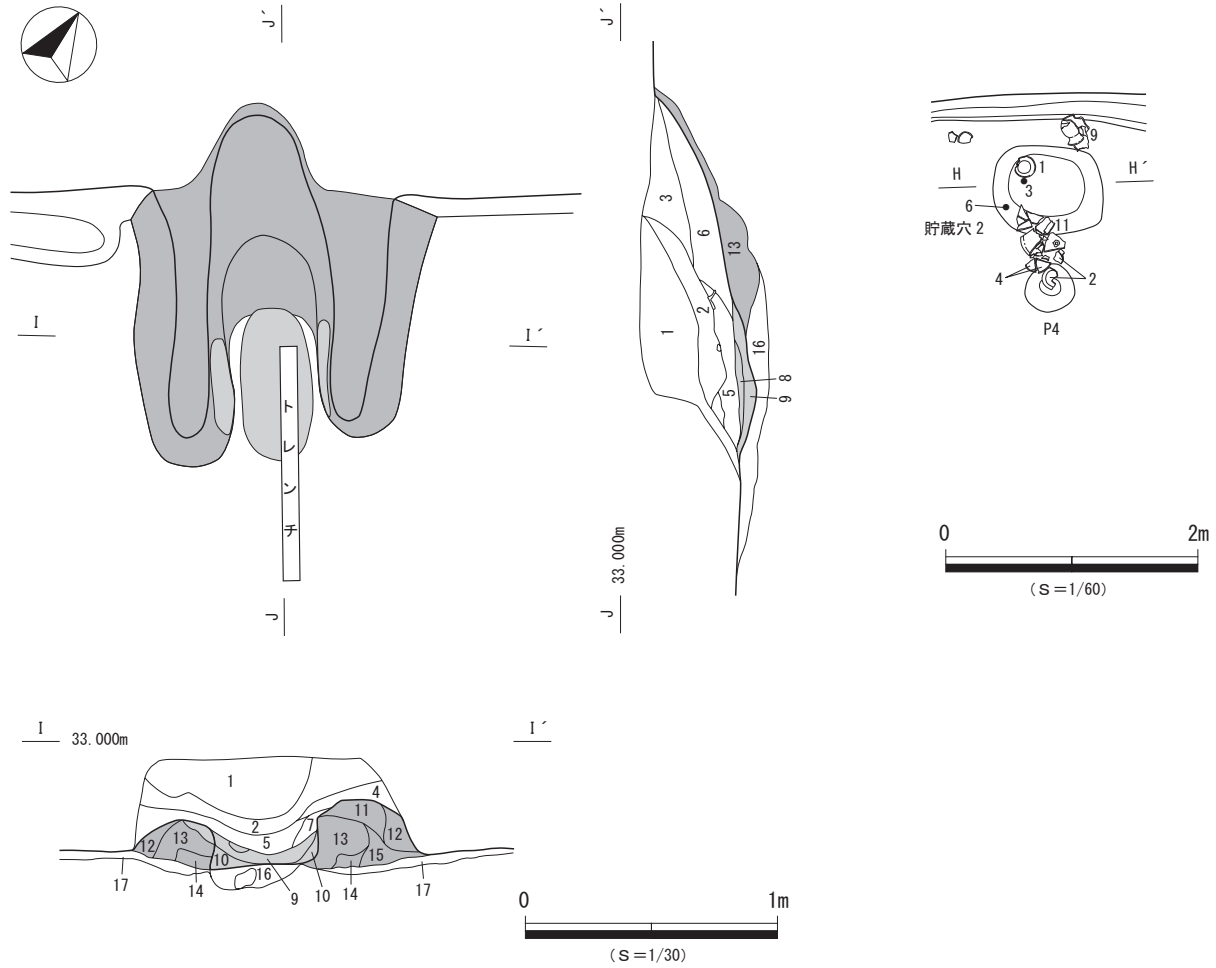
貯蔵穴 2：竪穴建物北西壁西寄りに位置する。長軸 87 cm，短軸 70 cm，深さ 45 cm を測る。断面形は逆台形で壁は緩斜して立ち上がる。覆土は 3 層に分層でき，第 3 層はローム土が主体で，その直上層の第 2 層はローム粒子を主体とし，ハードロームブロックを含み締まりの強い層である。覆土の状況から，竪穴建物が使用されている段階で埋め戻され，床を貼り直したものと考えられる。第 3 層が沈下した為か，竪穴建物廃絶時には，深さ 11 cm 程の窪みとなっていたと見られる。第 2 層直上から坏 (1) が出土した。

遺物出土状況：土師器片 363 点（坏 134，鉢 1，甕 227，甌 1）が出土した。覆土上層の遺物は少なく，ほとんどが第 4 層から床面にかけての層位から出土している。また，柱を抜き取り柱穴が埋没した後に土器を投棄したと考えられる。

所見：本跡の帰属時期については，出土した遺物の型式から 6 世紀中葉と考えられる。主軸の傾きや帰属年代が当跡第 3 地点で確認されている竪穴建物跡群とほぼ一致しているほか，竪穴建物の規模や竈の構築方法などが類似しており，同一集落内の竪穴建物であると考えられる。また，本跡南東に位置する第 2 号竪穴建物跡より若干新しく，位置も近接していることから，第 2 号竪穴建物廃絶後に本跡が構築されたと考えられる。



第6図 第1号竪穴建物跡実測図



第7図 第1号竪穴建物跡竈実測図・遺物出土状況図

第1号住居跡土層解説

- 1 10YR2/2 黒褐色 ロームブロック微量, 粘性なし
- 2 10YR3/3 暗褐色 ロームブロック微量・ローム粒子少量, 粘性なし
- 3 10YR2/2 黒褐色 ローム粒子微量, 粘性なし
- 4 10YR3/3 暗褐色 ロームブロック・粒子中量, 粘性・縮まりややあり
- 5 10YR3/3 暗褐色 ローム粒子少量, 粘性なし・縮まりややあり
- 6 10YR3/3 暗褐色 ロームブロック・粒子中量, 粘性なし・縮まりややあり
- 7 10YR3/3 暗褐色 ロームブロック・粒子多量, 縮まり強い(貼り床構築土)

柱穴土層解説

P1

- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム粒子微量, 焼土粒子微量
- 2 10YR3/3 褐色 ローム粒子少量, 縮まりなし(柱抜き痕)
- 3 10YR4/4 褐色 ロームブロック中量・ローム粒子多量, 縮まりあり
- 4 10YR4/4 褐色 ロームブロック少量・ローム粒子多量, 縮まりなし

P2

- 1 10YR3/2 黒褐色 ロームブロック・粒子微量, 粘性・縮まりなし
- 2 10YR3/3 暗褐色 ロームブロック少量・ローム粒子中量, 縮まりなし
- 3 10YR3/3 暗褐色 ローム粒子多量, 縮まりなし

P3

- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム粒子微量, 粘性・縮まりなし
- 2 10YR3/4 暗褐色 ロームブロック少量・ローム粒子中量, 縮まりなし
- 3 10YR3/3 暗褐色 ローム粒子少量, 縮まりなし
- 4 10YR3/3 暗褐色 ロームブロック・粒子中量

P4

- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム粒子少量, 粘性・縮まりなし
- 2 10YR3/4 暗褐色 ローム粒子多量
- 3 10YR4/4 褐色 ローム粒子主体, 粘性あり・縮まりなし
- 4 10YR4/4 褐色 ローム粒子主体・ロームブロック少量, 粘性あり・縮まりなし

P5

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム粒子少量, 縮まりあり
- 2 10YR4/4 褐色 ローム粒子主体, 粘性あり・縮まりあり

貯蔵穴1土層解説

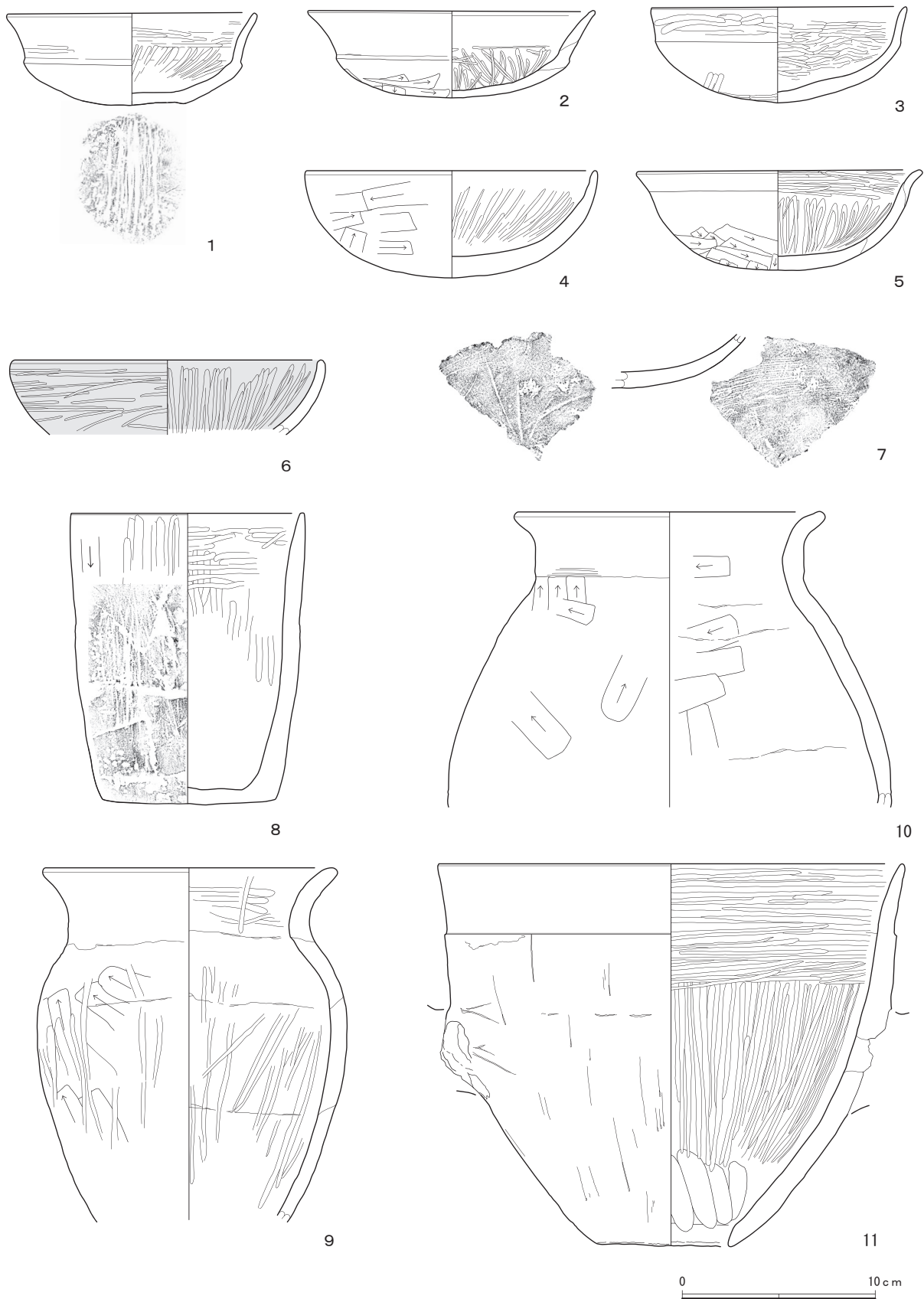
- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム粒子微量, 粘性・縮まりなし
- 2 10YR3/2 黒褐色 ロームブロック・粒子少量, 粘性・縮まりなし
- 3 10YR3/3 暗褐色 ローム粒子少量, 縮まりあり

貯蔵穴2土層解説

- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム粒子少量, 粘性・縮まりなし
- 2 10YR3/3 暗褐色 ローム粒子主体・ロームブロック中量, 粘性・縮まり強い
- 3 10YR4/6 褐色 ローム粒子主体・ロームブロック少量, 粘性・縮まりあり

竈土層解説

- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム粒子微量, 焼土粒子微量
- 2 5YR3/1 黒褐色 ロームブロック少量・ローム粒子微量, 焼土粒子微量
- 3 10YR4/4 褐色 ロームブロック・粒子少量, 焼土ブロック微量
- 4 5YR3/1 黒褐色 ロームブロック・粒子微量, 焼土ブロック微量
- 5 5YR3/2 暗赤褐色 焼土ブロック中量・焼土粒子少量, 炭化粒子微量, 縮まり弱い
- 6 10YR5/2 灰黄褐色 砂質粘土ブロック中量, 焼土ブロック微量, 粘性なし(天井崩落土)
- 7 5YR3/3 暗赤褐色 砂質粘土粒子微量, 焼土ブロック・粒子微量
- 8 5YR4/2 灰褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量, 灰少量, 粘性あり
- 9 5YR4/3 にぶい赤褐色 焼土ブロック・粒子少量, 炭化粒子微量, 灰少量, 粘性ややあり・縮まり弱い
- 10 5YR4/3 にぶい赤褐色 焼土ブロック微量・焼土粒子中量, 粘性なし・縮まり弱い
- 11 10YR5/2 灰黄褐色 砂質粘土ブロック中量, 焼土ブロック・粒子少量, 粘性なし
- 12 10YR4/3 にぶい赤褐色 砂質粘土粒子微量, 焼土ブロック・粒子微量
- 13 10YR5/2 灰黄褐色 砂質粘土主体, 焼土ブロック微量, 縮りあり
- 14 10YR4/2 灰黄褐色 砂質粘土主体, 焼土ブロック微量, 縮りあり
- 15 10YR3/4 暗褐色 ローム粒子少量, 砂質粘土粒子中量, 縮りあり
- 16 10YR4/4 褐色 ロームブロック・粒子少量, 焼土ブロック少量, 縮りあり※ゴツゴツと硬化している
- 17 10YR3/3 暗褐色 ロームブロック・粒子多量, 縮り強い(貼り床構築土)



第8図 第1号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3章 調査の成果

第2表 第1号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	法量 (cm)			胎土	色調	成形・整形技法	出土位置	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	13.8	4.7	—	長石, 石英, 雲母, 赤色粒子	にぶい 赤褐色	口縁部内外面横ナデ後ヘラミガキ, 体部内面放射状のヘラミガキ, 外面ケズリ後ミガキ	貯蔵穴2 覆土 (第1層)	底部砥具転用 PL 4
2	土師器	坏	14.7	4.5	—	長石, 石英, 雲母, 白色粒子, 小礫	赤褐色	口縁部内外面横ナデ, 底部内面多方向のヘラミガキ, 外面ヘラケズリ	床面	PL 4
3	土師器	坏	[13.3]	4.9	—	石英, 雲母	にぶい 黄橙色	内外面ナデ後ヘラミガキ	貯蔵穴2 覆土 (第1層)	PL 4
4	土師器	坏	[14.9]	5.4	—	石英, 雲母	褐灰色	内面放射状のヘラミガキ, 外面ヘラケズリ後ナデ	床面	PL 4
5	土師器	坏	14.5	5.1	—	雲母	褐色	口縁部内面横位のヘラミガキ, 外面横ナデ, 底部内面放射状のヘラミガキ, 外面体部下半～底部ヘラケズリ後ナデ	覆土上層	PL 4
6	土師器	坏	[16.4]	(3.8)	—	雲母, 白色粒子	にぶい 赤色	内外面ナデ後内面放射状のヘラミガキ, 外面横位のヘラミガキ	覆土下層	内外面赤彩 PL 4
7	土師器	坏	—	(2.7)	—	長石, 石英, 雲母, 白色粒子, 赤色粒子	黒褐色	内面疎らな放射状のヘラミガキ, 外面刷毛状工具によるナデ	覆土下層	PL 4
8	土師器	鉢	11.9	15.1	8.9	石英, 白色粒子	橙色	内外面縦位のヘラミガキ, 後内面口縁部横位のヘラミガキ, 外面底部ヘラナデ	覆土下層・竈覆土	体部砥具転用 PL 5
9	土師器	甕	14.8	(18.2)	—	長石, 石英, 白色粒子	にぶい 赤褐色	口縁部内外面横ナデ後ヘラミガキ, 外面ナデ, 体部内面ナデ後ヘラミガキ, 外面ヘラケズリ後ヘラミガキ	床面	PL 5
10	土師器	甕	15.5	(15.3)	—	長石, 石英, 雲母, 白色粒子, 小礫	にぶい 赤褐色	口縁部内外面横ナデ, 体部内外面ヘラケズリ後ナデ	床面	PL 5
11	土師器	甕	24.2	19.8	6.9	長石, 石英, 雲母	にぶい 橙色	口縁部内面横位のヘラミガキ, 外面横ナデ, 体部内面下半斜位の指ナデ後縦位のヘラミガキ, 外面縦位のヘラナデ, 体部穿孔後把手を差込ナデ付け	床面	PL 5

第2号竪穴建物跡 (第9～14図, 第3表, PL 2・3・5～8)

位置: D 6～8, E 5～8, F 4～8, G 6・7

規模・平面形: 本跡南部が調査区外に延びる。確認された規模は東西 6.35 m, 南北 5.68 m 以上で, 方形もしくは長方形と想定される。

主軸方向: N-37°-W

残存壁高: 確認面から最高 61 cm を測り, 外傾して立ち上がる。

壁溝: 調査範囲内では竈の南側及び北隅を除き廻っている。断面形はU字状を呈す。

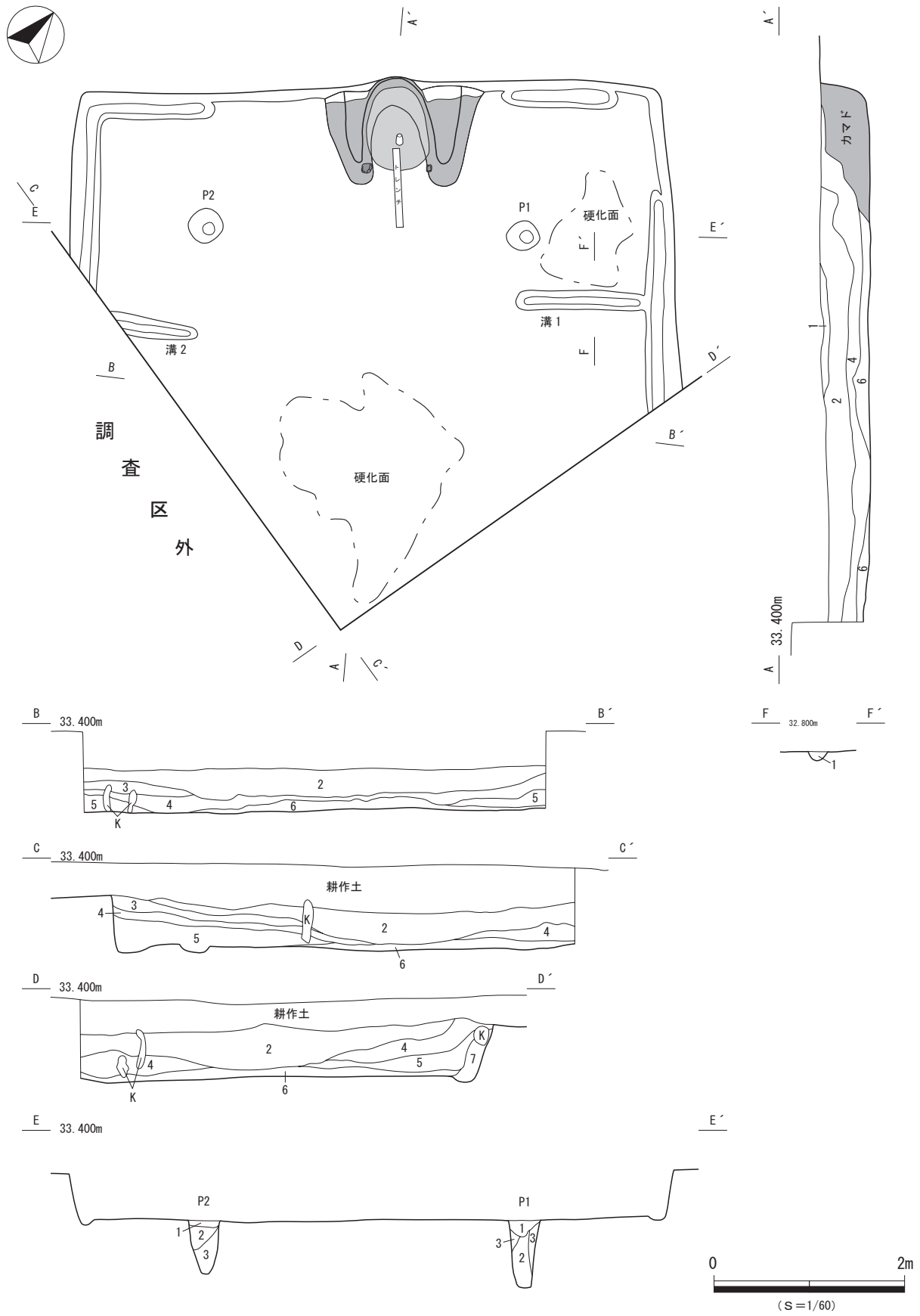
床: ほぼ平坦で, 南東・北西の壁から直交する様に溝を2条確認した。間仕切り溝と考えられ, 幅 14～20 cm, 深さは床面より 10～12 cm で断面形はU字状を呈している。床面は中央部と, 北東隅の間仕切溝に仕切られた範囲が硬化している。

埋没状況: 7層に分層できる。第1～3層は黒色土を主体とした自然堆積である。第4層以下はロームブロック・粒子を比較的に多く含むことから人為堆積と考えられ, 床面上より出土した遺物と第4層中の遺物(14)が接合関係にあることから, 第4層以下は本跡廃絶時に埋め戻されたものと考えられる。

柱穴: 2箇所検出され, 配置から双方とも支柱穴と考えられる。P1は直径 35 cm, 深さ 72 cm, P2は直径 39 cm, 深さ 56 cm を測る。

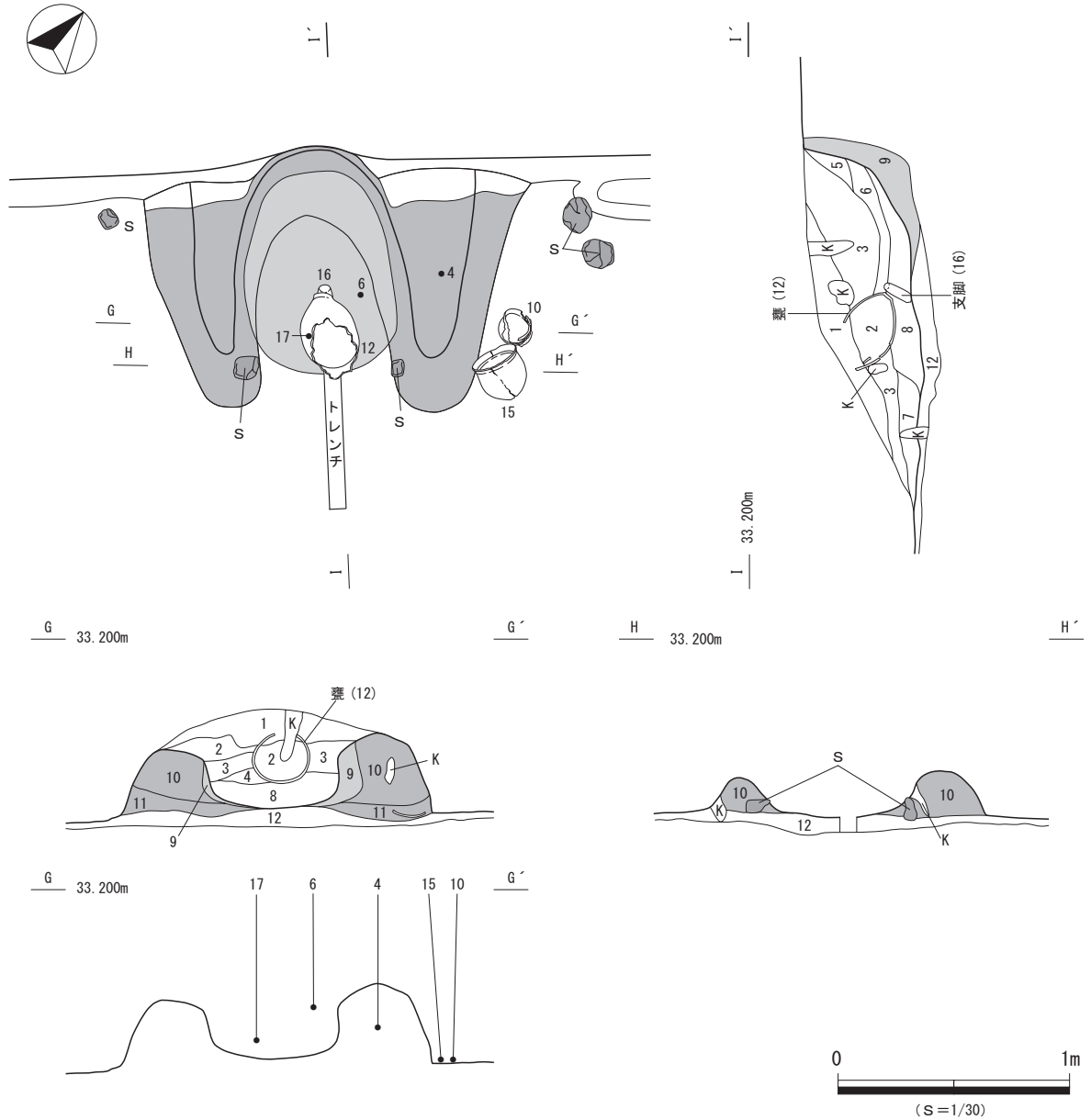
竈: 北東壁中央部に位置する。砂質粘土によって構築されており, 焚口から煙道部までは 110 cm, 燃焼部幅は 56 cm を測る。壁面と袖部の間はローム土が充填されており, 煙道部は壁面に若干の掘り込みが見られるものの, 袖部と同質の粘土を貼り付けて構築されており壁外に出ていない。天井部は崩落しており竈土層断面図中の第3・4層が相当する。また袖部の基部の最大幅は約 54 cm で, 床面上に粘土を積み上げて構築されている。火床部は床面をそのまま用いるため, 高さは床面とほぼ同じで火熱を受けゴツゴツと赤変硬化している。焚口部





第9図 第2号竪穴建物跡実測図

第3章 調査の成果



第10図 第2号竪穴建物跡竈実測図

第2号住居土層解説

- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム粒子微量, 粘性なし・縮まりなし
- 2 10YR3/1 黒褐色 ローム粒子微量, 粘性なし・縮まりなし
- 3 10YR2/1 黒色 粘性なし・縮まりなし
- 4 10YR3/3 暗褐色 ローム粒子少量, 粘性なし・縮まりなし
- 5 10YR4/4 褐色 ローム粒子主体・ロームブロック中量, 粘性あり
- 6 10YR4/4 褐色 ローム粒子主体, 粘性あり
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色 ローム粒子主体・ロームブロック中量, 粘性あり・縮まりややあり

柱穴土層解説

P1

- 1 10YR4/4 褐色 ロームブロック少量・ローム粒子多量, 粘性あり・縮まりなし
- 2 10YR4/6 褐色 ローム粒子多量, 粘性あり・縮まりなし (柱抜き痕)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色 ローム粒子主体, 粘性あり・縮まりなし

P2

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム粒子少量, 縮まりなし
- 2 10YR3/2 黒褐色 ローム粒子少量, 縮まりなし
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色 ローム粒子主体・ロームブロック少量, 粘性あり

間仕切り溝土層解説

溝1

- 1 10YR4/4 褐色 ロームブロック・粒子中量, 粘性あり

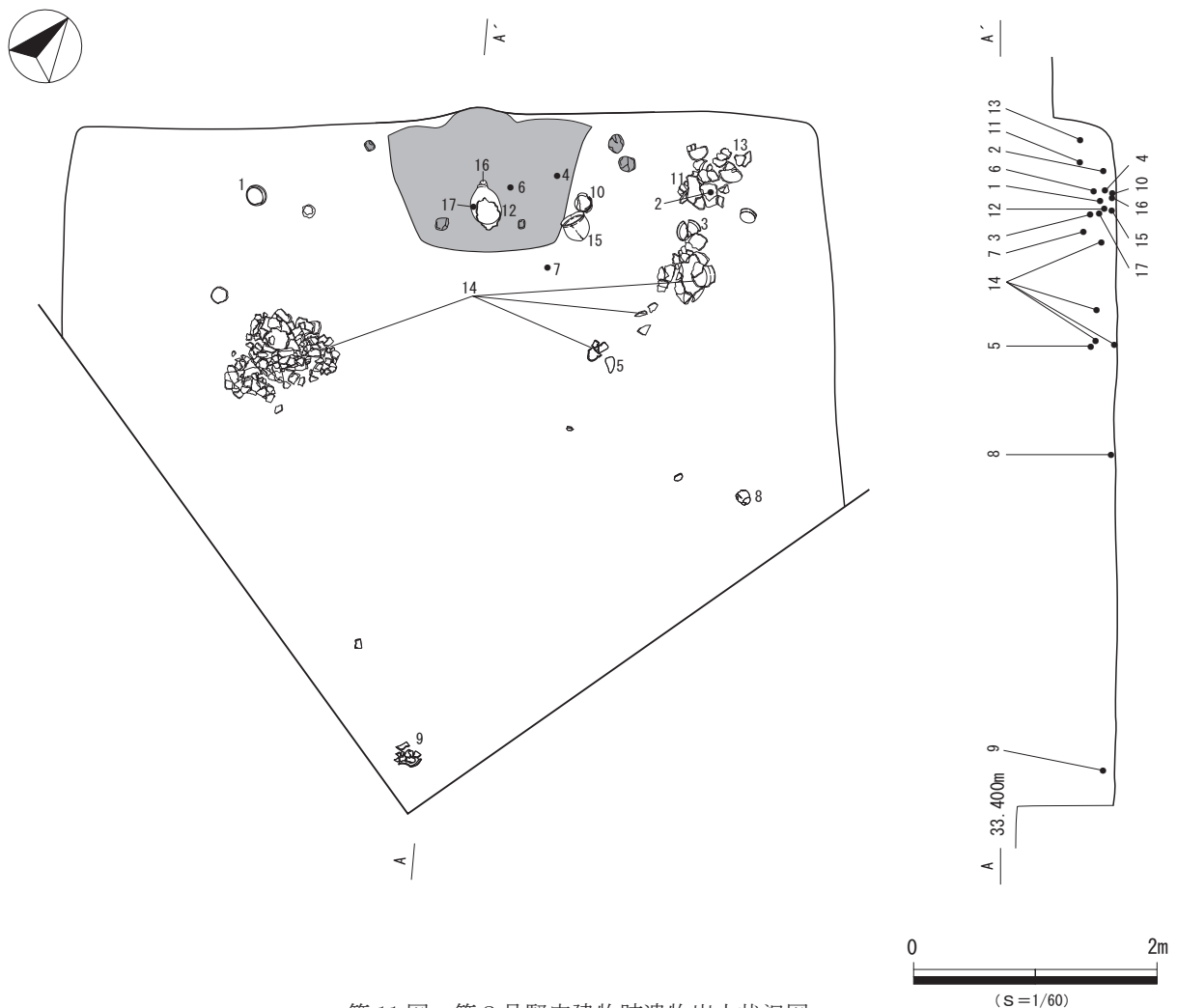
竈土層解説

- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム粒子微量, 粘性なし
- 2 10YR3/3 暗褐色 ロームブロック微量, 砂粒子微量, 粘性ややあり・縮まりあり
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質粘土ブロック主体, 焼土粒子微量, 粘性あり・縮まりあり (天井崩落土)
- 4 5YR4/8 赤褐色 焼土粒子主体・焼土ブロック中量, 粘性なし・縮まりあり (天井崩落土)
- 5 5YR3/3 暗赤褐色 ローム粒子微量, 焼土粒子微量, 砂粒子微量, 粘性ややあり・縮まりあり
- 6 5YR3/4 暗赤褐色 ローム粒子微量, 焼土粒子中量, 砂粒子少量, 粘性ややあり・縮まりあり
- 7 10YR3/3 暗褐色 ロームブロック・粒子微量, 焼土粒子微量, 粘性ややあり・縮まりあり
- 8 5YR4/8 赤褐色 焼土粒子多量・焼土ブロック少量, 粘性なし・縮まりあり
- 9 5YR3/6 暗赤褐色 砂質粘土ブロック主体, 焼土粒子少量, 粘性なし (竈内壁)
- 10 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質粘土ブロック主体, ローム粒子微量, 焼土粒子微量, 縮まり強い
- 11 10YR3/4 暗褐色 砂質粘土ブロック主体, ロームブロック少量, 焼土粒子微量, 粘性あり・縮まり強い
- 12 10YR3/3 暗褐色 ロームブロック多量, 粘性なし・縮まり強い ※ゴツゴツと硬化している

の両袖からは径7～11 cm程の凝灰質泥岩のブロックが確認され、焚口部の補強材として設置されたと考えられる。また同質のブロックが竈の外からも散見されており、これらも構築材の一部と推測される。なお、右袖内部からは坏（4）が出土しており芯材として封入された可能性が考えられる。内壁は、被熱により火床部から煙道部にかけて赤変している。また火床部中央には支脚（16）が置かれていたが、固定された痕跡は確認できなかった。

**遺物出土状況:**土師器片 672 点（坏 113, 甕 558, 甗 1）, 土製品 1 点（支脚）, 石製品 1 点（白玉）が出土した。これらの遺物は覆土の第4層から床面にかけて多くみられ、甕（14）が床面と第4層中から出土し接合関係にあることから、第4層以下の遺物が同時期に投棄されたものとみられ、埋め戻しの際に投棄されたものと考えられる。なお甕（14）の口縁部から頸部は第4層から比較的整った形で出土しているのに対し、体部は破碎され内面を上向きにしてまとめられた様な状態で床面から出土しており、廃棄する上で何らかの意図が感じられる。また甕の碎片は、胎土が粗く剥離が著しいため、接合関係は乏しいが、胎土や形の違いから少なくとも3個体以上が含まれていると考えられる。竈からは甕（12）と支脚（16）、白玉（17）が出土しており、支脚は煙道部に向けて、甕は焚口部に向けて傾いた状態で出土しており、本跡廃絶後そのまま放置され、竈天井部の崩落の際に傾いたものと考えられる。また、北側の袖付近では小型甕（10）と甗（15）が床面上から出土している。

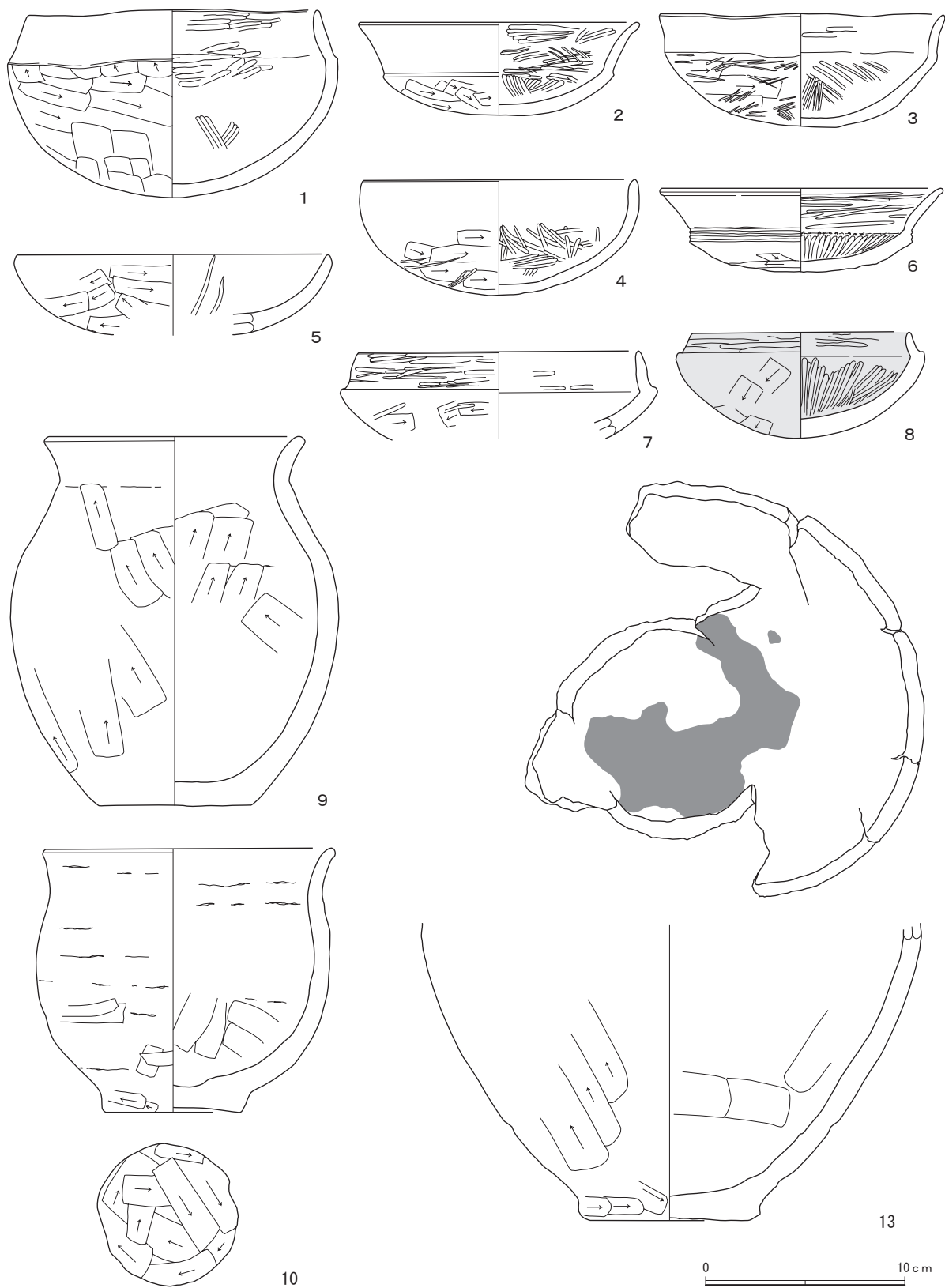
**所見:** 本跡の帰属時期については、煙道部が竪穴建物壁外に延びない初期の竈の様相を呈していることや出土した遺物の型式などから6世紀初頭から前葉のものと考えられる。また、竈導入期の竪穴建物であることや、



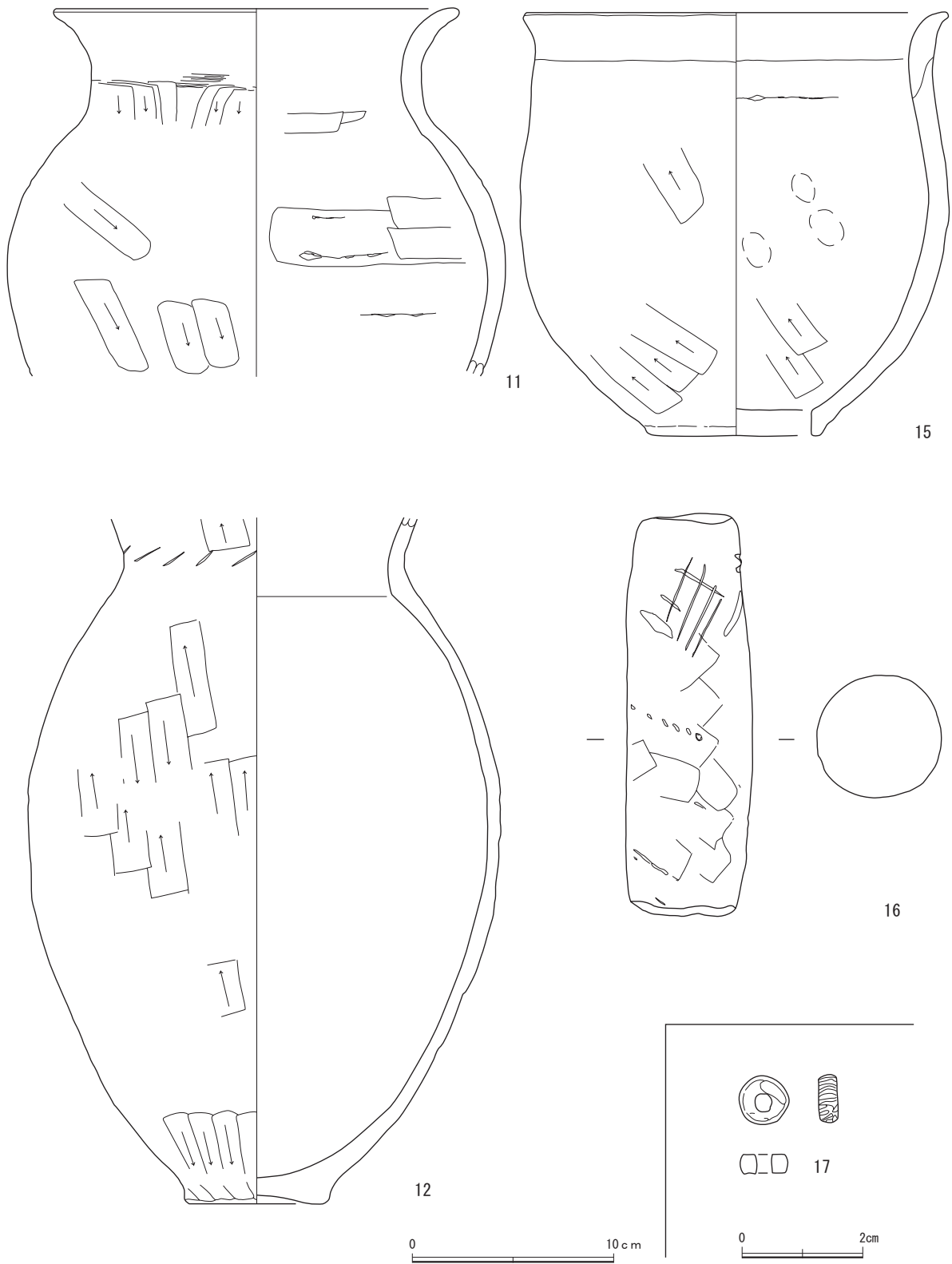
第11図 第2号竪穴建物跡遺物出土状況図

第3章 調査の成果

間仕切り溝をもつなど当跡第3地点の竪穴建物との類似点が見られることから、同じ集落内に営まれたものと考えられる。

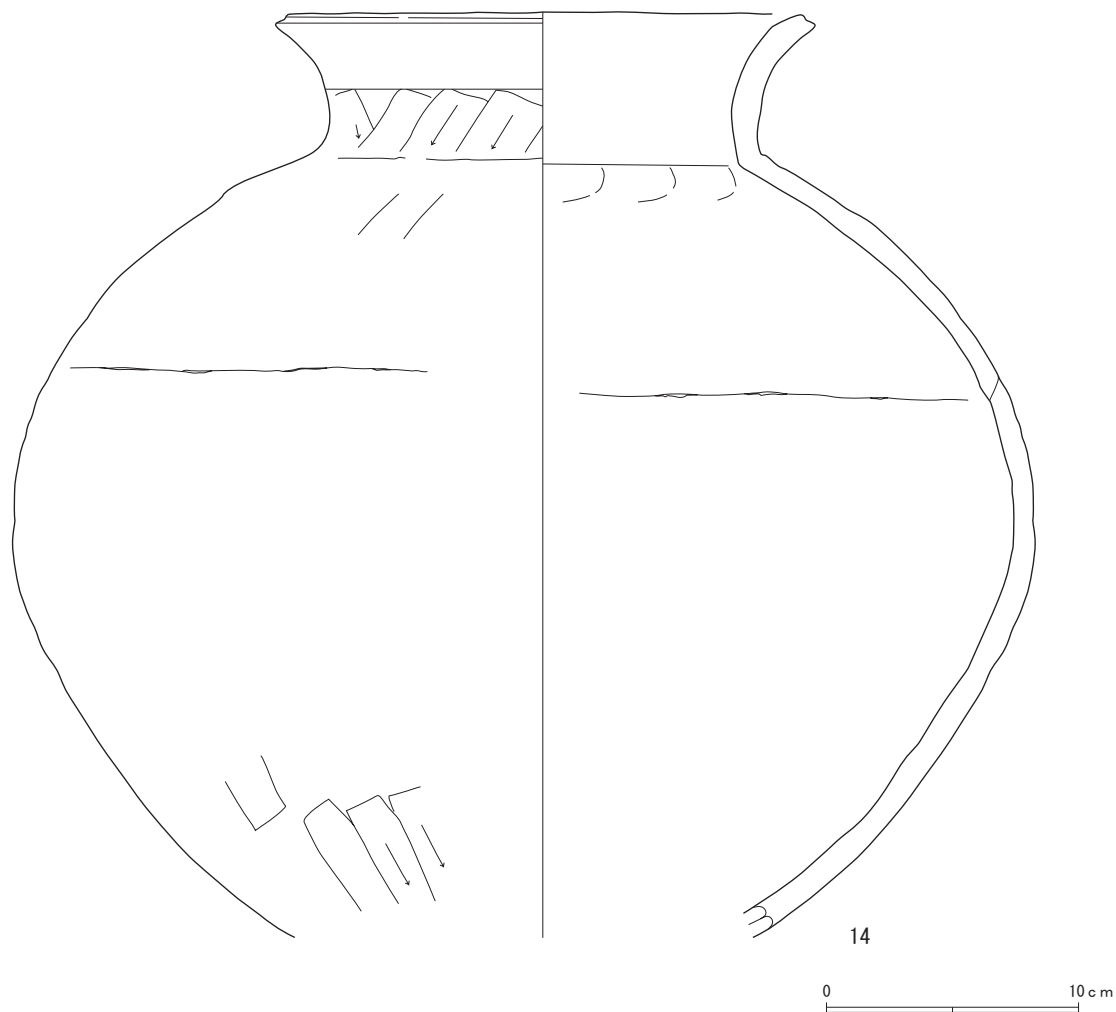


第12図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第13図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第3章 調査の成果



第14図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図(3)

第3表 第2号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	法量 (cm)			胎土	色調	成形・整形技法	出土位置	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	14.5	9.3	—	長石, 石英, 雲母, 白色粒子, 小礫	にぶい赤褐色	口縁部内面横ナデ, 外面ヘラミガキ, 体部～底部内面ヘラミガキ, 外面ヘラケズリ後ナデ	覆土下層 (第5層)	PL 5
2	土師器	坏	14.0	4.7	—	長石, 石英, 雲母	明赤褐色	口縁部内外面横ナデ後内面ヘラミガキ, 底部内面多方向のヘラミガキ, 外面ヘラケズリ後ナデ	覆土下層	PL 6
3	土師器	坏	1.42	5.7	—	長石, 石英, 雲母, 小礫	明赤褐色	口縁部内外面横ナデ後内面横位のヘラミガキ, 底部内面多方向のヘラミガキ, 外面ヘラケズリ後ヘラミガキ	覆土下層 (第4層)	PL 6
4	土師器	坏	[13.6]	5.7	—	長石, 石英, 小礫	にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ, 底部多方向のヘラミガキ, 外面ヘラケズリ後ヘラミガキ	竈袖内	PL 6
5	土師器	坏	[15.6]	(4.0)	—	長石, 石英, 赤色粒子	明赤褐色	口縁部～底部内面放射状のヘラミガキ, 外面ヘラケズリ後ナデ	覆土下層	PL 6
6	土師器	坏	[14.0]	4.1	—	長石, 雲母, 白色粒子, 小礫	橙色	口縁部内外面横ナデ後内面横位のヘラミガキ, 頸部横位の沈線3条, 底部内面放射状のヘラミガキ, 外面下端ヘラケズリ	覆土下層	PL 6

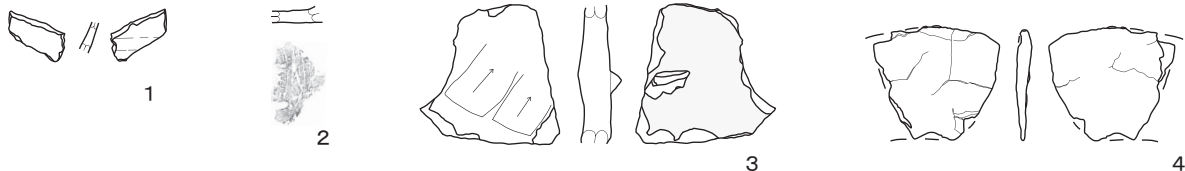
番号	種別	器種	法量 (cm)			胎土	色調	成形・整形技法	出土位置	備考
			口径	器高	底径					
7	土師器	坏	[14.0]	(4.3)	—	長石, 石英, 雲母, 骨針	にぶい黄橙色	口縁部内外面横ナデ後横位のヘラミガキ, 底部内面ナデ, 外面ヘラナデ後ヘラミガキ	覆土下層	PL 6
8	土師器	坏	[10.8]	5.2	—	長石, 石英, 白色粒子	黒褐色	口縁部内外面横位のヘラミガキ, 底部内面放射状のヘラミガキ, 外面ヘラケズリ後ナデ	床面直上	黒色処理 PL 6
9	土師器	小型甕	12.5	18.5	7.6	石英, 長石, 雲母	明赤褐色	口縁部内外面横ナデ, 体部内外面ヘラケズリ後ナデ	覆土下層	PL 6
10	土師器	小型甕	14.3	13.2	6.8	長石, 石英, 雲母, 小礫	にぶい褐色	口縁部内外面横ナデ, 体部内外面ヘラケズリ後ナデ, 底部外面ヘラケズリ	床面直上	PL 7
11	土師器	甕	19.8	(18.3)	—	長石, 石英, 雲母, 小礫	にぶい褐色	口縁部内外面横ナデ, 体部内面ヘラナデ, 外面ヘラケズリ後ナデ	覆土下層	PL 6
12	土師器	甕	—	(33.9)	6.7	長石, 石英, 白色粒子	にぶい黄橙色	頸部内外面横ナデ, 体部内面ヘラナデ, 外面ヘラケズリ後ナデ	竈内	PL 7
13	土師器	甕	—	(14.9)	8.3	長石, 石英, 雲母, 小礫	にぶい黄橙色	体部内外面ヘラケズリ後ナデ, 体部外面下端横位のヘラケズリ	覆土下層	底部内面に炭化物付着 PL 7
14	土師器	甕	20.4	(36.5)	—	長石, 石英, 雲母	にぶい黄橙色	頸部内面横位の指ナデ, 外面斜位のヘラナデ, 体部外面指ナデ, 下端ヘラナデ	床面直上	内外面ともに剥離が著しい PL 8
15	土師器	甕	21.0	21.0	8.7		橙色	口縁部内外面横ナデ, 体部内外面ヘラケズリ後ナデ	床面直上	PL 7

番号	器種	法量 (cm)			重量 (g)	胎土	特徴	出土位置	備考
		最大径	最小径	高さ					
16	土製品 (支脚)	6.3	5.2	19.8	825	石英, 雲母, 白色粒子	側面指頭痕, ヘラナデ	竈内	PL 8

番号	器種	法量 (cm)			重量 (g)	材質	特徴	出土位置	備考
		直径	厚さ	孔径					
17	石製品 (白玉)	0.78	0.3	0.28	0.3	滑石	両面平滑, 側面研磨, 片側穿孔	竈覆土第8層	PL 8

2 遺構外出土遺物 (第15図, 表4, PL8)

今回の調査で, 古墳時代後期に帰属する竪穴建物跡が2軒確認されたが, 遺構に伴わない時期の遺物が表土中より4点確認されている。(第15図, 第4表)



第15図 遺構外出土遺物実測図

### 第3章 調査の成果

第4表 遺構外出土遺物観察表

番号	種別	器種	法量 (cm)			胎土	色調	成形・整形技法	出土位置	備考
			口径	器高	底径					
1	須恵器	坏	—	(2.3)	—	長石	黄灰色	ロクロ目あり	表土	PL 8
2	須恵器	坏	—	(0.6)	—	長石	灰色	底部外面へラナデ	表土	PL 8
3	陶器	甕	—	(5.5)	—	長石, 石英	オリーブ 黄色	内面指頭痕, 外面藁灰釉	表土	PL 8

番号	器種	法量 (cm)			重量 (g)	材質	特徴	出土位置	備考
		直径	厚さ	孔径					
4	鉄製品	(5.0)	4.5	0.7	14.8	鉄	両端欠損	表土	鎌カ PL 8

第5表 出土遺物計量表

出土地点			第1号住居跡		第2号住居跡		表土		総計	
出土遺物			点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)
古墳時代	土師器	坏	134	2210.2	113	2319.8			247	4530
		鉢	1	649.2					1	649.2
		甕	227	7172.4	558	22687.6	33	256.9	818	30116.9
		甌	1	1690.1	1	2104			2	3794.1
	小計		363	11721.9	672	27111.4	33	256.9	1068	39090.2
	土製品	支脚			1	825			1	825
	小計				1	825			1	825
	石製品	白玉			1	0.3			1	0.3
	小計				1	0.3			1	0.3
	小計		363	11721.9	674	27936.7	33	256.9	1070	39915.5
古代	須恵器	坏					2	5.4	2	5.4
小計							2	5.4	2	5.4
中世	陶器	甕					1	38.5	1	38.5
小計							1	38.5	1	38.5
時代不明	鉄製品	不明					1	14.8	1	14.8
小計							1	14.8	1	14.8
総計			363	11721.9	674	27936.7	37	315.6	1074	39974.2



## 第4章 総括

はじめに

下遠田遺跡は縄文時代から近世にかけての複合遺跡であると周知されており、これまで試掘調査を含め5地点が調査されている。はじめに、既存の調査結果から当跡の大まかな性格について述べたい。

当跡は涸沼前川とその支流によって形成された支谷に挟まれた舌状台地の先端部に位置している。第1地点は標高約31mで当跡推定範囲の北端にあたり、涸沼前川が形成する低地に接する位置に設定されたが遺構は検出されていない。また標高約32m、当跡推定範囲の南端にあたる舌状台地上の縁辺部に第4地点が設定されたがこちらも遺構は検出されなかった。遺構が密に確認されたのは標高約33mの第2・3・5地点であり、当跡の土地利用は台地上の最頂部付近を中心に行われていたことが推測される。

現在まで確認されている遺構の中で最古のものは古墳時代後期の竪穴建物群で、第3・5地点から確認されている。続いて、中世に比定される遺構が第2・3地点より確認されており、中でも第2地点は当跡内で現在確認されている中で最も中世の遺構分布が濃厚な地点であり、掘立柱建物跡群、柵列跡、井戸等が確認されている。

また、第3地点からは14世紀前葉に比定される堀跡の一部が確認されており、内郭部が南西方向の調査区域外に広がると推定される。このことから、中世における当該地は、台地上の南側を中心土地利用が行われていたと推測される。(註1)

今般の調査区である第5地点からは古墳時代後期の竪穴建物跡が2軒確認され、第3地点で確認されている竪穴建物群を営んだ集団と同一集落を営んでいたものと考えられる。また第3地点の第5号竪穴建物跡からは炉と竈が併設された竪穴建物が確認され、今般調査区からも初期竈が確認されていることから、炉から竈への移行段階を示す貴重な資料を得ることができた。

### 竈についての考察

茨城県内の竈の出現は5世紀中葉まで遡り、那珂市森戸遺跡の例が現在確認されている中で最古である。しかし、同遺跡内や同時期の集落では炉が主流であり竈を持つ竪穴建物は例外的存在として周知されている。森戸遺跡からは4世紀代の豪族居館跡と考えられる遺構が確認されており、「首長クラスの豪族が存在し、大和政権とのつながりも強かったものと思われ、いち早く当地域に竈が導入された」(註2)と考えられ、一般集落において竈が導入され始めるのは5世紀後葉以降と遅れる。今回の調査で確認された第2号竪穴建物の廃絶時期については遺物による年代から6世紀初頭から前葉と考えられることから、本跡の構築時期は5世紀末葉の可能性がある。また、当跡第3地点では、6世紀中葉に廃絶したと考えられる竪穴建物跡から炉と竈が併設された状態で発見されており、当跡における竈の導入期は5世紀末から6世紀前半頃であると推測される。今回確認された第2号竪穴建物跡は、調査区の制限もあり全体像を把握することができなかったが、位置的に調査区外部分に炉を構築していた可能性は低く、炉を伴わない竪穴建物であった可能性が高い。竪穴建物の存続期間については慎重に検討して行かなければならないが、炉と竈が併設されている竪穴建物に先行して廃絶したと考えられる第2号竪穴建物跡に炉が確認されず竈が構築されていることから、同集落内においても竪穴建物によって竈の導入時期に差があるものと考えられる。

初期竈の構造については、稲敷郡阿見町星合遺跡の様相について榎村宣行氏により以下の3種に分類されている。(註3)

- I 類 煙道部が完全に壁の内側にあるもの
- II a 類 煙道部が壁に接するもの
- II b 類 煙道部が壁外に出るもの

## 第4章 総括

以上の分類では、「Ⅰ類」→「Ⅱa類」→「Ⅱb類」の順に変化し、煙道部が竪穴建物外に延びるほど新しくなるとしている。本調査で確認された6世紀中葉に比定される第1号竪穴建物跡の竈がⅡb類に属し、6世紀初頭から前葉と考えられる第2号竪穴建物跡の竈は煙道部をわずかに掘り込んではいるものの、砂質粘土によって補強がなされ煙道が壁外に出ていないため、Ⅱa類に属すると考えられる。県内の初期竈の様相を見ると、5世紀後葉に炉と竈が併設された竪穴建物が多くみられることから、当該期が炉から竈への転換期であると考えられる。その後の5世紀末から6世紀前半の竪穴建物は竈のほとんどがⅡb類となり、煙道部の壁外への掘り込みは長く延びている。このことを考えると、当跡の竈の構造は同時期の他の集落のものに比べ形態的に遅れがみられ、また6世紀中葉まで炉が併用されていることから、竈の導入時期に若干の遅れがあったと推測される。しかし、当集落の大半が未調査であることや当該地域における初期竈の発見例が乏しいため、資料の蓄積を待って検討を加えて行きたい。

第2号竪穴建物跡の竈は、壁と竈の間にローム土を充填するという特異な構築方法がみられる。同様の例は星合遺跡の6軒の竪穴建物からも確認され、いずれも5世紀末葉の初期竈でⅠ類に属す。この構築方法は、県内において当跡と星合遺跡以外での発見例はなく、両者間に直接的あるいは間接的な関わりがあるのか、こちらも資料の蓄積を待って検討を加えて行きたいところである。

竈の設置された位置を見ると、初期竈の傾向として、入口から見て左右どちらかの壁面に構築されるものが先行し、後に入口に相対する壁面へと移行して行く例が多いのに対し、当跡第3地点で確認されている第2号竪穴建物跡の竈は、奥壁に構築されていたものを取り壊した後、北東側の壁に作り直している。同地点第5号竪穴建物跡でも同様に、奥壁の竈を取り壊して閉塞した痕跡がみられ、北東側の壁は調査区の制約上確認されていないが、第2号竪穴建物跡同様に作り替えが推測できる。一般的な初期竈を伴う竪穴建物に見られる変遷とは逆行する竈の設置位置についての原因は判然としないが、当跡の竪穴建物構築の変遷を考える上で特筆すべき事例である。

### 出土土器の様相

今回の調査で出土した土師器製品は、坏、鉢、甕、甑などで、高坏や埴は認められなかった。この傾向は当跡第3地点の調査においても同様であり、高坏や埴を伴う古墳時代中期の器種構成とは異なり、後期の様相を呈していると言えよう。甕については、第3地点の調査において球胴型と長胴型のものが混在しているのに対し、本地点においては球胴型のみは認められず、竈の使用に特化した形状へと変化していると推定される。なお、第1号竪穴建物跡から出土した土師器の中には他地域の様相を示す可能性のあるものが数点みられた。7の坏の外面には刷毛状工具による調整がみられる。この特徴は栗圀式に代表され宮城県、福島県一帯に多く見られ、茨城県内ではひたちなか市三反田下高井遺跡や那珂市南酒出埴遺跡などで報告例があるが、出土数は僅かで、分布域の南限を把握するには至っていない。当遺跡がその文化圏に含まれているかどうかは別としても、本遺物はその影響を受けているものと考えられる。また10の甕は、体部の最大径が下部に寄っている当該地域では見られない器形であり、はっきりとした系譜は断定できないものの現在の埼玉県周辺と南東北地方に類似する器形のもが存在することからそのどちらかに系譜を持つ可能性がある。

今般の調査では遺構に伴う須恵器の出土はなかったが、第3地点の第2号竪穴建物跡から提瓶2点・広口壺1点が出土し、「生産窯については、判断がつかなかったが、技法の在り方から、上毛野地方（現在の群馬県）もしくは当該地域の技法を有した集団によって生産された可能性のある製品が認められた。」（註4）とされる。これらの資料は、当時の活発な地域間交流の一端を示すものである。

### おわりに

当遺跡は前回の第3地点の調査により竈導入期の集落であることが確認され、ま今回の調査によっても同様

の結果が得られた。なかでも竈の構築方法が阿見町星合遺跡に類例を見ることができたことは、大いに注目されるところである。また、当該地域においては古墳時代後期以降に集落数が急増し、下遠田の集落もその中の一つであることから、当時の活発な人の動きと竈の普及、広域との交流が一連の流れの中にあるものと推測される。5世紀後葉は大和政権が地方に対する直接支配に乗り出した時期であり、地方支配の強化は民衆生活にも強く作用していたと考えられる。下遠田の集落も権力による民衆支配の中で生まれ、そこにはこれまでの生活様式を大きく変化させる程の強い力が加えられていたのではなかろうか。

#### 註

- (1) 既存の調査結果については水戸市教育委員会より資料提供を受けた。
- (2) 樫村宣行 1995 「茨城県における初期竈の様相」『みちのく発掘』一菅原文也先生還暦記念論集一 菅原文也先生還暦記念論集刊行会
- (3) 樫村宣行 1999 「星合遺跡における初期カマドの様相について」『菟玖波』第3号一高根信和先生還暦記念号一 菟玖波倶楽部
- (4) 田村雅樹 2015 「一般県道友部内原線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書 下遠田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第398集 財団法人茨城県教育財団

#### 【参考文献】

- 茨城県史編集委員会 1985 『茨城県史』原始古代編 茨城県
- 岩崎卓也 1984 「古墳時代の知識」『考古学シリーズ』6 東京美術
- 内原町史編さん委員会 1996 『内原町史』通史編 内原町
- 大川清 鈴木公雄 工楽善通編 1997 『日本土器事典』雄山閣
- 樫村宣行 1995 「和泉式土器編年考一茨城県を中心として一」『研究ノート』5号 財団法人茨城県教育財団
- 樫村宣行 2003 「那珂川以北を中心とする「切石組み竈」の一考察」『領域の研究一阿久津久先生還暦記念論集一』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会
- 黒澤秀雄 1992 「一般県道西小埜真岡線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 裏山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第73集
- 小林和彦 宮崎剛 2012 「国道345号岩井バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 宮内遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第359集 財団法人茨城教育財団
- 小林清隆 2005 「房総における竈導入頃の様相一竈と貯蔵穴 その2一」『千葉県文化財センター研究紀要』24 公益財団法人千葉県教育振興財団文化財センター
- 作山智彦 2009 「堂ノ上遺跡における食膳具の様相」『年報28』財団法人茨城県教育財団
- 桜井崇充 高村勇ほか 2014 「木崎浄水場更新事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 南酒出塚遺跡」『那珂市埋蔵文化財調査報告書』那珂市教育委員会
- 田所則夫 川又清明 1998 「一般国道6号東水戸道路改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 三反田下高井遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第128集 財団法人茨城県教育財団
- 谷 旬 1995 「カマド再考」『千葉県文化財センター研究紀要』16 公益財団法人千葉県教育振興財団文化財センター
- 谷 旬 1978 「古代東国のカマド」『千葉県文化財センター研究紀要』7 公益財団法人千葉県教育振興財団文化財センター
- 寺門千勝 1997 「阿見東部工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書 星合遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第137集 財団法人茨城県教育財団
- 寺門千勝 大関武 2000「主要地方道つくば真岡線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 明石遺跡 明石北原遺跡 上白畑遺跡(上・下)」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第164集 財団法人茨城県教育財団
- 西野則史 浅井哲也 1990 「一般国道349号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 北郷C遺跡 森戸遺跡(上・下)」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第55集 財団法人茨城県教育財団

附章 炭素・窒素安定同位体比分析

山形秀樹・竹原弘展・中村賢太郎（パレオ・ラボ）

1. はじめに

水戸市下遠田遺跡第5地点より出土した土器内面の付着炭化物の起源物質を推定するために、炭素と窒素の安定同位体比を測定した。また、炭素含有量と窒素含有量を測定して試料のC/N比を求めた。

2. 試料および方法

試料は、土器内面に付着する炭化物1点である。測定を実施するにあたり、試料に対して、酸・アルカリ・酸洗浄（HC1:1.2N, NaOH:0.1N）を施して試料以外の不純物を除去した後、測定を行った。炭素含有量および窒素含有量の測定には、EA（ガス化前処理装置）であるFlash EA1112（Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。スタンダードは、アセトニトリル（キシダ化学製）を使用した。また、炭素安定同位体比（ $\delta^{13}C_{PDB}$ ）および窒素安定同位体比（ $\delta^{15}N_{AIR}$ ）の測定には、質量分析計DALTA V（Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比にはIAEA Sucrose（ANU）、窒素安定同位体比にはIAEA N1を使用した。

測定は、次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、EA内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させる。次に還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムでCO<sub>2</sub>とN<sub>2</sub>を分離し、TCDでそれぞれ検出・定量を行う。この時の炉および分離カラムの温度は、燃焼炉温度1000°C、還元炉温度680°C、分離カラム温度45°Cである。分離したCO<sub>2</sub>およびN<sub>2</sub>はそのままHeキャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定した。

得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいてC/N比を算出した。

3. 結果

表1に試料情報と炭素安定同位体比、窒素安定同位体比、炭素含有量、窒素含有量、C/N比を示す。なお、試料中の窒素含有量が検出限界以下のため、窒素含有量および窒素安定同位体比の結果は得られなかった。

表1 結果一覧表

試料情報	$\delta^{13}C_{PDB}$	$\delta^{15}N_{AIR}$	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N比
土器内面付着炭化物	-25.7	検出限界以下	0.127	検出限界以下	—

4. 考察

得られた土器付着炭化物の窒素安定同位体比及びC/Nは窒素含有量が検出限界以下のため値は得られなかったが、炭素安定同位体比はC<sub>3</sub>植物に相当する値であり、主にC<sub>3</sub>植物に由来する炭化物と推定される。

【参考文献】

赤澤 威 南川雅男 1989 「炭素・窒素安定同位体比に基づく古代人の食生活の復元」田中琢 佐原 眞編『新しい研究法は考古学に何をもたらしたか』: 132-143, クバプロ

坂本 稔 2007 「安定同位体比に基づく土器付着物の分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』137: 305-315.

米田 穰 2008 「丸根遺跡出土土器付着炭化物の同位体分析」豊田市郷土資料館編『丸根遺跡・丸根城跡』: 261-263, 豊田市教育委員会.

Yoneda, M., M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa 2002 「Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter」Nagano, Radiocarbon44(2), 549-557.

吉田邦夫 宮崎ゆみ子 2007 「煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究」平成16-18年度科学研究補助金基礎研究B（課題番号16300290）研究報告書研究 代表者西田泰民『日本における稲作以前の主食植物の研究』, 85-95.

吉田邦夫 西田泰民 2009 「考古学化学が探る火災土器」新潟県立歴史博物館編『火災土器の国 新潟』: 87-99, 新潟日報事業社.

# 写 真 图 版





調査区全景（東から）



調査前風景（南西から）



遺構確認状況（西から）



第1号竖穴建物跡完掘状況（南東から）



第1号竖穴建物跡土層堆積状況（南東から）

PL2



第1号竖穴建物跡遺物出土状況（南東から）



第1号竖穴建物跡遺物出土状況（東から）



第1号竖穴建物跡竈完掘状況（南東から）



第1号竖穴建物跡竈袖部断割り状況（南東から）



第1号竖穴建物跡掘方完掘状況（南東から）



第2号竖穴建物跡完掘状況（南東から）



第2号竖穴建物跡土層堆積及び遺物出土状況（北西から）



第2号竖穴建物跡完掘状況（西から）





第2号竖穴建物跡遺物出土状況（南東から）



第2号竖穴建物跡遺物出土状況（南から）



第2号竖穴建物跡遺物出土状況（東から）



第2号竖穴建物跡竈完掘状況（南東から）



第2号竖穴建物跡竈土層堆積状況（南東から）



第2号竖穴建物跡竈土層堆積状況（南から）

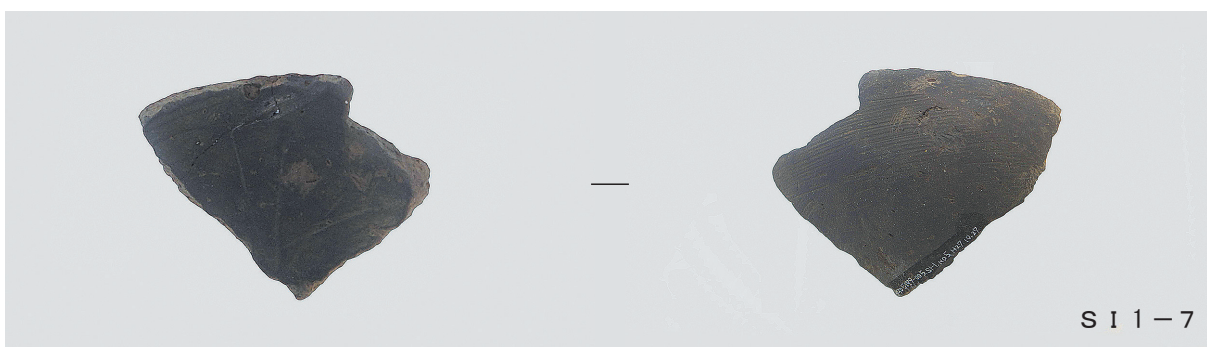


第2号竖穴建物跡遺物出土状況（南東から）

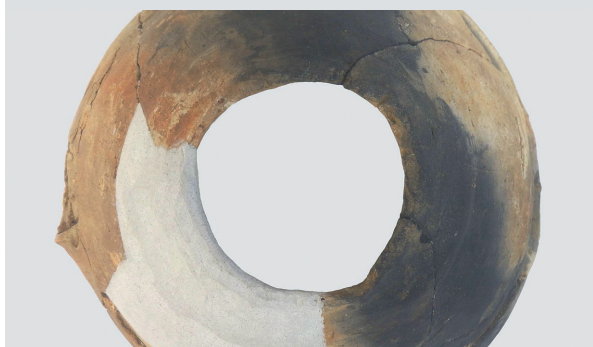


第2号竖穴建物跡竈袖部断割り状況（南東から）

PL4



第 1 号竖穴建物跡出土遺物



第1・2号竖穴建物跡出土遺物

PL6

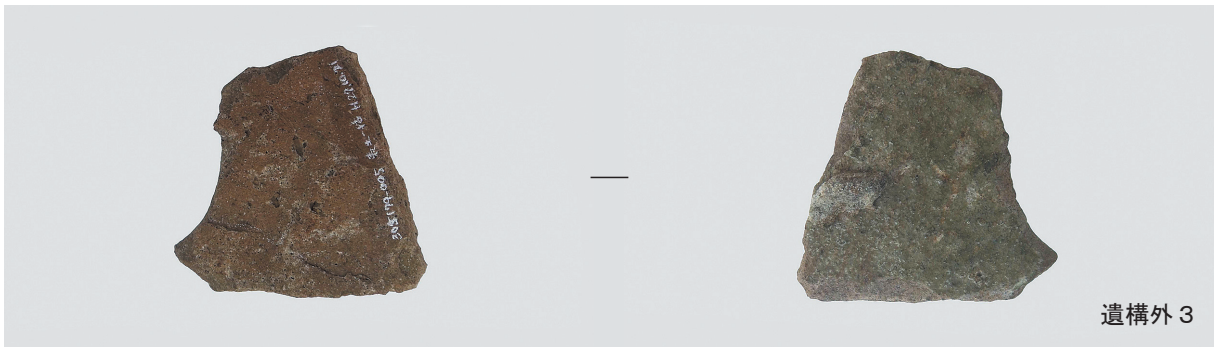
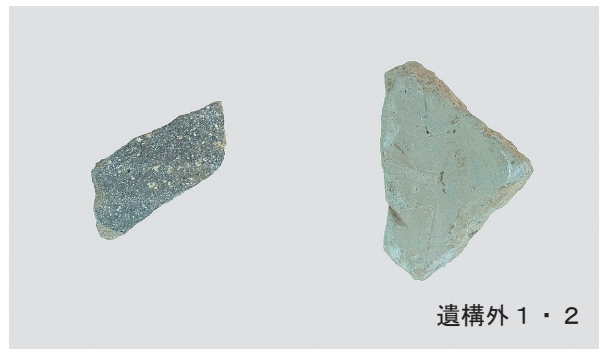


第2号竖穴建物跡出土遺物



第2号竖穴建物跡出土遺物

PL8



第 2 号 竖穴 建物 跡・遺構外・表土 出土 遺物

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	げどおだいせきだい5ちてん								
書名	下遠田遺跡第5地点								
副書名	店舗建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財報告								
シリーズ番号	第76集								
編著者名	萩原宏季・米川暢敬								
発行機関	水戸市教育委員会 / 〒 310-0852 茨城県水戸市笠原町 978-5								
編集機関	関東文化財振興会株式会社 / 〒 308-0846 茨城県筑西市布川 1012								
発行年月日	西暦 2016 (平成 28) 年 3 月 31 日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	標高	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号						
げどおだいせき 下遠田遺跡	いばらきけんみとし 茨城県水戸市 ごへいちよう 五平町 288-1 外 2 筆	305	179	36° 21' 6"	140° 20' 27"	33m	20151019 ～ 20151031	124 m <sup>2</sup>	店舗建設工事に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
下遠田遺跡	集落跡	古代時代	竪穴建物跡 2 棟			土師器 (杯・鉢・甕・甔) 須恵器 (杯) 陶器 (甕) 土製品 (支脚) 石製品 (白玉)		第 2 号竪穴建物跡から出土し た土師器の中には他地域の文 化の様相を呈するものが見ら れ、他域間の交流を窺わせる 資料として特筆される。	
要約	古墳時代後期の集落跡で、竪穴建物跡が 2 軒確認された。第 2 号建物跡に設置されてた竈は、煙道が建物の壁外に延びない古式のものであり、6 世紀初頭から前葉の竈導入期のものと考えられる。当跡第 3 地点の炉と竈が併設された建物と合わせて、当該地域における竈導入期の様相を窺わせる貴重な資料である。								

水戸市埋蔵文化財調査報告第76集

## 下遠田遺跡第5地点

—店舗建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

発行 2016(平成28)年3月31日

発行 水戸市教育委員会  
〒310-0852 茨城県水戸市笠原町978-5  
電話 029-306-8132(歴史文化財課)

編集 関東文化財振興会株式会社  
〒308-0846 茨城県筑西市布川1012  
電話 0296-28-7737 FAX 0296-28-7551

印刷 山三印刷株式会社  
〒311-4153 茨城県水戸市河和田町4433-33  
電話 029-252-8481